

淨土



十二月号 三十周年纪念特集

法然上人鑽仰会



—目 次—

巻頭のことば 運命を賭ける		(1)
随 想	岸信宏・藤原弘道・礼宮美津子	(2)
青少年に仏教教育を	正力松太郎	(6)
創刊三十年に寄せて	佐藤 密雄	(6)

特集浄土三十年の歩み

浄土創刊の回顧	里見 達雄	(7)
吉田絃二郎先生を想う	真野 竜海	(9)
戦時下の浄土	一瀬 直行	(11)
教学の人 中村弁康上人	吉野 翠幹	(13)
佐藤賢順博士を偲ぶ	佐藤 良智	(15)
老兵の思い出雑記	村瀬 秀雄	(17)
縁	幸 田 文	(22)

— . — . — . — . — . — . — . — . —

念仏は人類の主流的結論である	七条 晃正	(26)
近世文名録 福田闡正僧正	高橋 良和	(24)
仏教人生訓 平生即臨終の覚悟	宝田 正道	(34)
一言法談 五里夢中	渋谷 賢応	(38)
浄土のこよみ	大橋 俊雄	(36)
伊豆大島伝道記	田中 祥雄	(32)
すばらしい祐天の法力	松崎仁三郎・中島 正方	(28)
家康と三河一揆	鶴田 湛泉	(40)
創刊号より		(22)
ご法語をいただく	村瀬 秀雄	(48)
表紙の解説	石上 善応	(43)
日本浄土教物 めざましい一条派の発展	鈴木 成元	(44)

選撰本願念仏集
 南無阿彌陀佛
 往生之業
 念仏為先
 道綽禪師立聖道淨土二門而捨聖道心歸淨土之文

安樂集上之問曰一切衆生皆有佛性起初以未應

值々ノ佛何因至今仍自輪迴

依大乘聖教良由不得二種勝

重出也此何者言二一謂聖道

選撰本願念仏集

南無阿彌陀仏 往生之業
念仏為先

の二十二字は上人の真筆である。



選撰集(廬山寺藏)↑

←法然上人御像(知恩院藏)



浄土創刊号



鑽仰会出版物より



結集



P-1(缺落)

破って持ち去られている

P-2(缺落)

破って持ち去られている

P-3(缺落)

破って持ち去られている

P-4(缺落)

破って持ち去られている

空上人、まことは弥陀如来の応現か」と、顕真以下いならぶ聴衆まで感嘆したことであった。顕真はみずから香炉をとって先頭にたち、高声に念仏を称えながら行道して、三昼夜の不断念仏を行い、以後念仏の徒となった。

常日ごろ、みずから愚痴の法然房ときめつけるばかりでなく、人に接して頗る謙虚な宗祖ではあるが、こと御自身の信念にいたるとまことにきびしく、臆せず毅然と言い張った宗祖の心根に強く胸打たれるを覚える。

想えば機械文明の驚異的発達に伴い、自己疎外、人間不在ということが現実の事実として指摘される現今にあつて、なにはともあれ、己れ自身のなんたるかを省察することの急務を痛感せざるを得ない。

念仏読経することしばし、思いを今昔にいたし本堂をあとに寺庭にたてば、紅葉する木立が晩秋の夕日を浴びて美しく、まったくあみだ仏にそむるころの色にいでば秋のこづえのたくひならましという宗祖の道詠そのものである。

比較的きれいなものは十五種四方位の大きさに切り、フライパンの油拭きに廻しますが、これは一回使えばもう捨てられるものです。あとの布巾を除いた殆どが雑巾に仕上げられて、まだまだ働かされるわけです。この雑巾縫いが、私には何とも楽しく、また貴重な時間でもあるのです。

ふっと、あることばが頭に浮かびました。一昨年来読み次いできた数学者の岡潔博士の著書も「春宵十話」「紫の火花」「風蘭」「春風夏雨」と、いつのまにか四冊も私の本棚に並びました。

あれは確か、「風蘭」の中の一節ではなかったと思います。

△なんでも長くやっていますと、行きづまる時期というものがあるのですが……そういうときどうするかといいますと、私はたいてい「水滸伝」を読むのです。ときによっては「三国志」も読むし、……なぜこういうことになるのかという続きぐあいは、自分でもあまりよくわからないのですが、わたしとそういうものとの関係は、高等小学校時代にさか

っかりすると主人のねまきの袖口がほころびていたり、ゴム紐が伸びっ放しで、それでも黙って（多分あきらめているのでしょう）二カ所三カ所と、ころころの結び目をつくって、どうやら紐の役目を通してきたような彼の下着をいじっていると、自分だけの懐しさに浸ってばかりもおれません。それはそれで、急いで取り繕うこともやりますが、一年に一回は、どうしても雑巾縫いの時間を持たないと、落ち着けないというのが本音です。たまたま茶の間のテレビの前で、主人はシーズンの野球に夢中でした。私は例の雑巾縫いに。

全くの気狂いじみた観戦ぶり。日頃主人が声援を送っているN選手は、ここしばらくどうも振るわないらしい。

主人は最後に云ったものです。

「あーあ。こんなサマ、女房も見ているだろうに恥ずかしくないのかえ!!」

どうも彼の本音に比べれば、私の妻たる資格のいよいよ怪しきものかと、やっぱり反省せざるを得なくなってくるのです。

青少年に仏教々育を

正力 松太郎

(読売新聞社社長)

戦後二十年の宗教界において目立つことは、既成仏教が著しくすいたいの傾向を持っていることだ。全国に七万数千の寺院があるにもかかわらず、生きた活動はよりようたるものではないのか。一般の人は仏教そのものが、現代社会で力を失ったと考えている。しかし、仏教の真理は社会が暗くなればいっそう光明を放ってくるもので、現代を救い、生命力を与えられる力をもっているものである。仏教の正しい姿を教え、理解させる必要がある。それにはこれから成長して、次代をになう青少年にそれを知らせることからはじめなければならない。仏教各教団は、目先の効果があがらない青少年教化にはあまり力を入れてこなかったと思う。私は昭和三十七年、仏教各教団の指導者に、仏教寺院が主体となって、全国に日曜学校を設立することを提唱、全国青少年教化協議会が結成された。現在五千三百の日校が釈尊の教えによって、良心に恥じない正しい人間の育成をはかっている。各教団もようやく青少年の教化運動の重要性にきづいてきたが、さらに努力を重ねてもらいたい。

佐藤 密雄

(大正大学学長)

昭和のはじめマルキシズムの旋風のあと、満州事変・日支事変とファシズムが抬頭し、世情人心がきわめて不安定な時代であった。その頃宗祖法然上人に還って、念仏信仰の生き生きとした姿を捉え、実践的運動を推進しようと同志相つどい、法然上人鑽仰会が設立された。そして機関誌「浄土」を刊行してからはや三十年の星霜をみる。十年一昔というが、戦後といっても二十年の歳月を過している。三十年の歴史の歩みは決して平穩無事ではなかった。内外の社会情勢の变革、特に戦争という暗い谷間のなかで、毎月々々浄土を世に送り出すことは困難なことであった。幾度か挫折し、いくたび危機を迎えたことであろうか。幸い同人の結びつきかたきこともさること乍ら、浄土を支えて下さっている多くの会員読者の励ましによって、とにもかくにも、ここまで至りえたことは尊く、ありがたいことである。これも仏縁のおかげというものであろう。今三十周年を迎え、思いをあらたにいよいよ法然上人鑽仰のともしびをかかげて捲土重来を期したいと思う。

特集 浄土三十年の歩み

「浄土」創刊の回顧

里 見 達 雄

(大本山増上寺執事長)

法然上人の御業績は、識者の間に於ては夙に高く評価されていたが、一般的には上人その方も余り多く知られていなかった。弘法大師や、親鸞聖人、日蓮聖人などは、早くから大衆に親しまれていたが、法然上人とは、どういう御方であるか、知らない者が多かった。それは上人が渋い存在であったからであろう。

真野正順君（大正大学教授）等は、それを遺憾とし、中村弁康君（浄土宗前教学部長）等と諮って「法然上人鑽仰会」設立の計画を立てられ、私のところへ相談に來られた。それは当時私が浄土宗務所にいた関係からであるが、私は勿論双手を挙げて賛成した。

真野、中村両君は、それから各方面の賛同を得て「法然上

人鑽仰会」を設立されたが、「鑽仰会」が先ず着手した事業は、上人を紹介するため一流新聞に著名な文士によって、上人伝を掲載することであつた。それには佐藤春夫氏が適任であらうということになり、両君と一緒に私は佐藤春夫氏を訪ねて執筆を依頼したが、佐藤氏の承諾を得ることは非常に



ありし日の真野先生

困難であつた。それを両君は、熱心に説得されたので佐藤氏も遂に心を動かされて、資料の提出を求められるようになった。その結果が朝日新聞に百余日に亘って連載された「掬水譚」である。その後、佐藤氏は深く法然上人に傾倒され、亡きいまでも知恩院の墓域に眠っておられるが、その因縁は、こ

のときに発するものであらう。次には、機関紙「浄土」の創刊であつた。当初の目標は、一般書店の店頭で売れるものということであつた。新聞にも広告し、書店にも並べられたが、いつの間にか宗門雑誌となり、今日に及んでいる。

過去三十年、世の風雪と闘いながら維持経営につとめられた同人諸君の熱意と努力には敬意を表するが、それは、当初の目標とは相当距離がある。それは私共の責任であるかも知れないし、又現在の同人諸君は、それ以上の抱負を持っておられるかとも思うが、一面宗門としても考うべき時期であらう。

宗門は、唯一の伝道雑誌として「浄土」を育成すべきである。同人諸君も、その使命に適うよう紙面を刷新充実すると共に宗門に力強く働きかける必要があると思う。然し鑽仰会の目指したところはこれらのみではなかつた。あらゆる角度から上人を研究し、鑽仰することであつたが、鑽仰会も「浄土」に僅かにその名を留める有名無実の存在となつた。

鑽仰会の設立、本誌の創刊に側面から微力を致した一人として、当時を顧み、感慨深きものがあるが、それは三十年の過ぎ去った昔である。時は流れ、新しい時代となつた。当然新しい人達によって、上人鑽仰の新しい運動が起こさるべきであり、私は心からそれを期待する。

吉田絃二郎先生を想う

真野 龍海

(大正大学助教授)

私は、昭和二十四年頃、「浄土」誌の編集発行のお手伝いはじめてから、吉田先生の所へ、お邪魔するようになった。

高名の先生に、お目にかかるのは光栄でもあったが、かなり緊張して出かけたものだ。御不自由なお身体を、なつ様の介添えて、しずしずと応接間に出てこられる。湯呑みも、なかなか手がふるえて持ちにくそうであった。その中を、「浄土」のために執筆頂くのかと思うと恐縮した。

相對していると、詩人とか作家というより、崇高、清潔なる宗教者という感じである。どちらかというところ、もう文壇の中から遠ざかり、表に出られる事もなく、御夫人すでに亡く、孤高のお暮しではあったが、その静かさの中に、淡々として悟境に遊び、且、充実、気力ある姿は、この世にありうる菩薩とは、このような方を云うのではないかと私かに考えさせ

られた。戦前の「壺丸と柿丸」等に表示された自然主義というか、平和主義というか、温和の中にも激しい厳しさを持っておられた。

先生を敬愛して出入する方には、皆、誠実な方々であった。その一人、毎日新聞出版局の故山崎安雄氏がおられた。氏は、出版界の事情に関してベテランであったが、同時に、「人情記者」と自称される程、情の厚い方であり、関東一の大親分と親交があるかと思えば、気の毒な事情のある女性の面倒に奔走するというふうであった。先生の所で、「浄土」の編集同人、故藤田寛雅さんと中学が同じである事がわかり、「浄土」の事を知られた。私は、当時、「浄土」の年間経費の中、一月分は広告でという案だったので、図々しくも、毎日新聞に山崎氏を訪れ、依頼した。快よく、毎日の広告を

出して下さり、読んでも楽しい広告文をあげようとて、半頁、ぎっしりと原稿を頂いた。その広告料も、今にして思えば人情記者のポケットマネーではなかったかと考えられる。

山崎氏は「私は、先生の書信は、きちんと缺で開封する。」と話された。正直な所、私は、どきりとした。先生の玉稿

は、郵

送が常

であつ

た。配

達され

ると取

るも遅

しと大

急ぎで

封を切

って読



晩年の吉田絃二郎先生

み出し、さもない編集者の根性で、何頁位？ というような計算も頭でしながらの事であるから、とても山崎さんのようではなかった。

しかし、先生の掲載頁は、なめるように校正したつもりであった。所がである。山崎氏曰く、「先月の浄土の「先生」

の文で、『鳥がさわぐ』とあったのは、先生の文ならば、『鳥がさわぐ』、だよ、もっとも鳥と鳥とではまちがいやすいから、鴉の字ならばまちがわないんだがね」と早速、原稿を調べると、やはり鳥。私は、まだ先生の心に入っていない事を残念に思った。

先生は、この信頼すべき山崎氏と相談して、身の御自由を回復すべく、昭和三十一年春、手術を受けられた。その半ば成功を喜ぶ間もなく重態となり不帰の客となられた。山崎氏は、ついに奇蹟は起らなかったと、語られたが、氏も、先年、停年をまたず急逝された。私には、なぜあのようなリスクの高い手術をなさったかがわからない。

私はこの文を書くについて先生が夏に滞在された信州星野温泉の地を踏み追憶の情を新にしようと、八月一日、立寄った。同地には、先生が亡き奥様を偲んで建てられた碑がある。星野温泉の左手、あひるの群れ泳ぐ池の橋を渡り、右折左折山路をちよつとつま先上りに登ると、やや広い道―塩壺への道―に出る。落葉松の林を左に行くと十字路となり、左先角に、弘田竜太郎先生の「小諸なる古城」の曲碑が小広い場所をとってあるのが、見え、その隣りに、白樺の林間のほの暗らさを背にして一基の自然石の碑がある。これが、吉田先生の建てられたもので、碑面には、

あきかぜの

ふもとははやし

浅間山

明枝女

とある。夫人が亡くなられたのは、今しも八月であった。高原の秋は、早くやってくる。八月というに、ふと気がつく、もう、すすきの穂が、きらきらと肌寒い風にゆれていく。時の無常を、しのびやかに感じさせる。じっと碑文を讀

戦時下の「浄土」

みかえしながら、先生の夫人を思い、人を思い、自然を思う崇高な心境を今更の如く感じた。

この碑を通りこすと三十米程で一四六号国道で、中軽井沢―鬼押出しの観光バス等が往来している。中軽井沢から来ると、星野温泉入口の先、塩壺温泉(車)入口の表示を右に、二三分、右側である。立札もなく、ほとんどの人は知らず気づかない。「浄土」有縁の人、有縁の時に訪ねてほしい。喜ばれる事でしょう。

一 瀬 直 行

(浅草瑞泉寺住職)

「浄土」が三十周年記念を迎えるときいて、今更過ぎ去った長い年月を振り返り、色々に感慨にふけっている。この間世

の中は随分変化したし、歴史と共に「浄土」も苦難な道をへて来た。それにしてもよく今日まで続いたものと思う。当然

なことながら、どんな時代にもおもねることなく、おのれの方法を一途に歩いて来たといえよう。

初めて法然上人鑽仰会が誕生し、「浄土」が発刊された当初のことが思い出される。最初の編集責任者は道瀬さんが当

たっていた。そこへ佐賀さんと私が協力の意味でお手伝いすることになった。佐賀さんは事務的なことが不得手であったし、私ときたらそれに輪をかけたようにからったであった。それに又、編集上のことは、私なりの意見を出してみたところが、通るわけではなかった。既に雑誌の方針やかたがきまっていたし、編集上の範囲を限定されていた。結局付かずはなれずの中途半端なたちで、正直のところ情熱も薄らいでいった。それでも毎日とまではいかないが、浅草くん dari から手弁当で編集室の宗務所まで通っていた。

それにつけても「浄土」について忘れることの出来ない思い出がある。それは戦時中のことであり、戦況も切羽詰って窮地におち込んだ時である。従来通り毎月雑誌を出してゆくどころの騒ぎではなかったが、その困難な状況下におかれても「浄土」の息は、決して絶えることがなかった。

私は三月九日の夜間空襲で本所深川浅草の下町一帯が一夜にして焦土と化した時、生命だけは拾って、暫らく家族と共に国府津に疎開していた。まだはげしい戦時中のことであるが、当時「浄土」に関することは、焼失をまぬがれた青山の梅窓院の尖塔の一室をかりて事務所に当てていた。

当時私は国府津から青山まで、とても毎日とはいかなかったがせつせと通っていた。途中空襲警報が鳴って何度危険に

さらされたかわからない。車中で敵機の銃撃を受け、車体の下にもぐり、線路上に這いつくばったことがあった。又、品川まで来た時、無数の焼夷弾がおち、駅や陸橋が炎上したこともあった。その時は仕方がなく私は品川から一面焼け野原の中を青山の梅窓院まで歩いていった。

やっこの思いで梅窓院の尖塔までたどりつけば、そこには成田さんが待っていた。二人は顔を見合せて、これではどうしようもないと、次ぎの会う日を約束しただけで空襲下わかれた。尖塔が焼け残っていたとはいふものの、ひどくいため付けられていたので雨もりがはげしい。二人は洋傘をさしながら、「浄土」の続行についてうち合わせていた。床もテーブルもびしょ濡れになった中で、尚二人は希望を捨てなかった。

よくその頃尖塔の破れた窓硝子から敵機が爆弾をおとし、遠く黒煙の立ちのぼるのを眺めていた。そしてふと亜鉛屋根を見ると、この惨禍の中で生きのびる筈がないのに鳩の羽根が落ちていたり、白い糞を見付けて不思議に思ったこともあった。

世田谷の成田さんとは、帰途空襲警報のとけない中を地下鉄のホームで右と左にわかれた。お互いに動きのつかぬことを知りながら、なんとしても続けて行こうという意欲に燃え

ていた。つまりは八方塞りの窮地に追い込まれても、尚「浄土」の息は絶えなかったといえる。

戦時下の「浄土」について語っているうち、編集部よりの注文である佐藤春夫氏の思い出について書くことが出来なく、既に約束の枚数がつきてしまった。作家としての佐藤氏が念仏三昧のうちに暮らしていたということは、そう簡単に触れられる問題ではない。このことは他の機会にゆずりた

い。

ともあれ、「浄土」について、仲間うちの同人雑誌にすぎないとか、広い読者層に積極的に訴える力にかけているとか、いつみても同じ顔ぶれで新鮮味がなく、低調であるとか、なかなか一般の批判は手きびしい。その中であって無報酬ながら毎号佐藤春夫氏や吉田弦二郎氏が執筆されたことは、新風を送り込んでいたといえよう。

教学の人 中村弁康上人

吉 野 翠 幹

戦災で焼け残った増上寺書院の片隅に、二間続きの執事長室があった。部屋のお世話をする係僧があったかどうか知らぬが、ずい分とほこりっぽいし、薄暗くもあった部屋であった。ここに寝泊りしていた中村弁康師は、かなり汚れた白衣を着て、どっかりとあぐらをかいていた。調度品としては古机が一つあるだけで、その上には書類だか書籍だかが、うず

高く積まれていて、机の側には一升瓶が立っていた。いかにもうらぶれた感じがして訪ねる者に決して好感を与えるものでなかったが、当時の社会情勢を思わせるに十分なものがあった。

うつうつたる闘志を内部に秘めながら、思うことなす事が一つとしてはかどらず、身体は病魔に冒されているとすれば、

いかな中村弁康師でも気持が沈んでしまうのも無理からぬことであった。その当時かなり重い糖尿病に悩まされていた。

師は大正四年、三十才という若さで宗会議員に推され、最初の宗議会で三十分に亘り布教々化の問題点を当局に質問したので、一度に宗門の注目を浴び後々の語り草になったものである。明治三十八年には自坊実相寺に幼稚園を創設した位であるから、教化に一見識を持っていたのも当然であった。その後二十年間の議員生活には常に教学問題で活躍し続けた。

また師は多趣味な人で、観世流謡曲や活花をよくし、茶道は江戸千家の師範であった。俳句は撫象の号で知られ、朝顔や菊作りが自慢であった。他方教化活動としては、山崎弁栄上人の光明会で重きをなし、土屋観道師の真生運動に参加し、更に椎尾弁匡師の共生運動には常に枢軸をなしていた。

法然上人鑽仰会が創立された当時は、教学部長の職にあり、もし真野正順先生を師団長とし、佐藤賢順先生を参謀長とすれば、師は高級副官というところで、終始一貫して会のために尽力してくれた。師は毎号のように「浄土」に原稿を寄せられたが、編集部から原稿の催促をされたことが一回もなかったという一事をみても、師の人がらの一端をうかがい知ることができると思う。

かつて真野先生は、師を評してこう申されたことがある。「中村さんは、全く純真な、自然児のような性格を豊かにそなえられた方で、それだけ信仰の方についても、傍目もふらずまっしぐらに、みごとな前進を示され、進んで止まることなかったようです」

師は教学部長を辞めてから、専心鑽仰会のために努力した。中でも浄土の信仰相談欄を担当して好評を博した。そのため質問が殺到し、約半数は頁数の関係で掲載できなかった位である。昭和十年から八年間に亘る信仰相談から抜すいて「信仰相談」を刊行したところ、たちまち売り切ってしまったことをみても、この相談が多くの人から愛されてる事がわかる。

師は増上寺執事長を三期勤め、昭和二十五年に病氣のため辞職するまで、終戦当時の難局をよく切り抜けた。戦災のため事務所をなくした鑽仰会のためにもよく働いて、浄土の命脈を保った功績は大きかった。その間のことについて現執事長里見達雄師はこう語っている。

「その間、地に散った米粒を、一粒一粒爪の先で拾い上げるような根気と忍耐とを重ねて少しずつ浄土を盛り上げ、その再興に努力されました」

増上寺執事長を辞めてからは、自坊実相寺には帰らずに木

更津専念寺に療養のため隠棲してしまった。近所の子供たちのために塾を開き、子供たちが帰ってしまうと、鉄鎚を片手に持って、こわれた机を直している姿をみかけたものであった。

華々しかった生涯に較べて、病魔のためといいながらいかにも淋しく、昭和三十四年七月三日西遷された。行年七十五才。

佐藤賢順博士を偲ぶ

佐藤良智

(大正大学教授・文博)

賢順先生は、学者であって信仰家であった。先生の学者としての評価はすでに定まっている。近代仏教学に西欧的な方法論を導入して、その学問的地位を定着せしめたのは先生であった。あたかも電子計算機が近代産業の一つのポイントであるように、先生の御仕事は、近代仏教学の一つのポイントを与えたことに偉大な功績があった。ややもすれば史学的仏教学が近代仏教学の特色のような傾向を多分にもつ時に、組織仏教学と言うか、思想的仏教学というか仏教の思想信仰を正面からまともに掘下げて行く、しかも近代的方法論をもつ

て、つきすすんで行かれ、多くの業績を残されていかれた先生の足跡は偉大であった。今後も時の経過と共にその御真価は増々発揮されてゆくものと思われる。また、後に続いて行く人達の燈明となり、よき後継者が続出して行くであろうし、また、そうあって欲しいと願うのはわたくし一人ではないでしよう。

しかし、先生の学問は、単なる学問のための学問ではなく、それがそのまま、信仰につながるものであったのである。言わば、信仰に思想的根拠を与えているものであった。しか

も、他の宗派に比して、極めて思想性にとぼしいとされる浄土教、特に浄土宗的信仰にかかわるものであった。これがわれわれ末徒には重大な意味をもつのである。浄土宗義を現代という時に浮きあがらせたのが先生である。宗義は常に今に生きなければならぬ。過去のものでも、未来のものであってもならぬ。

ここで先生の信仰家として光りが放たれるのである。単なる



故佐藤賢順先生の温容

学者ではなく、これをふまえて、信仰の道に生きる先生。これが先生の実体なのである。人格の中に学問と信仰が素直に溶け合った人。これが近代人の一つの理想像ではないでしようか。先生は見事にこの理想像を実現した人であったのである。それはそのまま、人がらにさながらに現われていたので

ある。先生ほどいわゆる邪念がなく、純粹で、温和な人も数少ない。温い人の一人であった。そばにいて何となく体温の伝わってくるような人であった。言わば、宗教家の典型のようないひとであった。何らの抵抗も感じられず、というより何となく引きつけられる人であった。年輪という不可思議のものが加われば自ら宗門の最高位にあがまれるひとになられたであろう。そのようなことは先生にとっては何のかかわりもないことであつたろうが、先生のおいのちの輝き場であつた、この雑誌浄土には多大の執念ともいうべきものがあられたことと思う。真野先生がこの雑誌の生みの親であるならば、この方も今は亡き中村弁康先生と共に賢順先生はそだての親であつたと思う。雑誌「浄土」とこれをめぐる宗教運動は浄土宗近代伝道史に一大光芒を放つものだと思いますが、その中核的推進力となられたのは先生である。

深い信仰と思索による御内容に洗練された流麗な文章をもつてしたその御健筆は、いかばかり人びとの生活の燈火となり、生きゆく力となったことであらう。

そしてまた、「浄土の友の会」を持たれ遠隔の地まで自ら出むかれて、有縁の方々に親しく接し、道を語り、信を説き、あまつさえ、高潔にして、温和なお人柄をもって多くの人々の心をあたため、はげまし、更にはまた、ささえとなら

れたことであろう。

思えば先生の御生涯は、刻苦の学問の道と、それにささえられた高く、聖なる信の道とを、輝やかしくもドッシリと歩まれたのである。雑誌浄土をシッカリと小脇にかかえてあゆまれたのである。

雑誌「浄土」もよきひとびとにかかえられ、ささえられて

よくも長年のとしつきを歩みつづけてきたものである。さて、この先きいつ迄この「浄土」は歩みつづけるであろうか。先生は安養のお浄土にましジツト見守っていられることであろう。願わくば法力とこしなえにこの小誌に加わり、永くながく、真理の光がかがやき、ひとびとの救いと精進のかてとなることを念ずるのみである。

老兵の思い出雑記

村 瀬 秀 雄

（大乘淑徳学園事務局次長）

S大学の事務室で和田正系先生にお会いしたことがあった。先生は長年に亘って千葉大学医学部で講義をなさっているが余り病人の脈をとらないお医者さんで、鑽仰会の古い会員でもあった。話は自然と鑽仰会のことになり、先生はこういわれた。

「浄土の創刊号から今日まで、欠本なしに全部揃っています。先日も取り出して、もっとも表紙だけですが、初めから

眺めてみて、有史以来の激動期であった三十年間の歳史を目の前にした感じがしました。それにしてもここまで生き抜いてきた仰鑽会の皆様には、ほんとに御苦勞の程を感謝します」

先生の鑽仰会に対する御支援が終始一貫していただけない、先生の言葉にはしみじみした余韻があった。

政党政治に終りをつけさせた五・一五事件と国際連盟から

の脱退があった翌年に鑽仰会が誕生し、浄土創刊号の出た翌年に少壮軍人のクーデター二・二六事件がおきたことを思うと、いかに鑽仰会が左右に大きくゆれ動いていた最中に結成されたかがわかる。それだけに会の設立宣言は意気旺んなものがあった。

「日本文化の母胎は法然上人の思想と人格である。法然上人を知らずして、日本精神を語ることはできない。日本を語らんとするものは吾等と協同せよ」

これが会の趣旨書であった。各書店の軒下にはためいた「信仰雑誌浄土」の黄色い小旗はまさに念仏信仰者の総けっ起を思わせるものがあつた。浄土は旱天の慈雨のように人々の心の中にすい込まれていった。中でも一寺院一支部の合言葉によつてつくられた各支部の活躍がめざましかった。浄土を片手に戸別訪問をしてくれた支部長がいた。輪読会や座談会を月例法話として開いてくれた支部が多かった。やがて本山、宗務所、各寺院と一体となつて祖師報恩の道を進んでくれた。

例えば鑽仰会に対して宗務所から年額二千百円の補助金が支

出された。この金額は当時の会費と今の会費との比率で換算してみると、今なら年額百万円に相当することになる。これだけみても宗門の鑽仰会に対する支援ぶりがわかるというものである。

のである。

世に超えし
弥陀の誓いは
ますらをの
ますらをぞ知る
限りなき
弥陀の恵みは
わが如き
痴れ者もうく

南無阿弥陀仏

佐藤 春 夫

(浄土創刊号巻頭より)

るようにまでもりあげ育てて下さった人々に対しては心からの敬意を表わさなくてはならない。

× × ×

佐藤春夫先生は浄土が創刊されてから二年近くの間、殆んど毎号に執筆して、無名の信仰雑誌に百万の味方を与えて下さった。

ある日のこと先生のお宅に参上すると、丁度中食をとるところだから、一緒に食事をしてゆけということであった。遠慮なくあがると、先生は紅茶にパン食というところであった。先生は私にも紅茶を入れ、パンを焼き、それに自らジャムをつけて下さった。先生と私と向合っているわけだが、その側には椅子に腰かけた夫人が、玄米を入れた一升瓶にステッキをさしこんで、さかんに精白作業をされていた。夫人は少しも手を休めずに、私にこう質問した。

「極楽とか地獄とか、ほんとうにあるのでしょうか。主人はいつも夢のようなことをいって私には信用できません」

さてなんと返事をしたものか、パンを食べながら困っていると、先生は笑いながら助太刀してくれた。

「お前は極楽にこなくてもいいのだヨ。極楽にまでお前と一緒にほめんだネ。第一極楽を信じないものが往ける道理がないではないか」

その後は一緒に大笑いとなった。

しかしその前に、先生の次のような文を読んで知っていたので、この会話を単なる冗談とは決して思わなかった。その

文の要旨は「早稲田の学生四、五人がやってきて、話が信仰のことになった時、学生の一人が極楽や地獄がある等とは童話なら別だが、信じる気持ちにもなれないといって笑った。私はその学生にいつてやった。君は自分の鈍感さを、鈍感なるが故に自慢することはないではないかと。学生は黙ってしまった」

というのであった。

またある時、先生のお宅に参上すると、先生の方から近く浄土に原稿を執筆するといわれた。その内容は三回連載の童話であって、題は「あみださま」であるという。まさに願ってもない話であった。そして法蔵菩薩についても少し調べたいので、よい文献を教えてほしいとのことであった。

これは専門家に相談するに若くはないと思って、幸い近くにおられた大野法道先生の許に行つて教えを乞うた。早速に法道先生は幾冊もの大蔵經を持ち出されて、法蔵菩薩に關係のある經典を指てきして下さった。そこでそれぞれの經典の所に紙の葉をさしはさんで大蔵經をおかりすることにした。とても多くは持ちきれないので、その内三冊だけを抱え込み、その足で再び春夫先生のお宅に引き返した。

春夫先生はすぐその場で、紙の葉をたよりに次々と經典をこく明にご覧になった。やがて先生のいうには、これらの經

典は幸い皆拝見して知っているが、ただ一つこの經典だけは読んでいないので、大切な大藏經であるが一冊だけ拝借したいというのであった。

童話一つ執筆なさるにもこれだけの準備をされるということ、大藏經の經典をそれまでに多く読破されていたということとで、先生の勉強ぶりに今更ながら感心した。

そして法道先生からの質問を伝えた。即ち

「浄土三部經は常に読誦しているのだが、作家という立場から春夫先生はどのように御覧になっているか」

というのであった。すると春夫先生は、

「素人の所感で誠に恐れ入るが、浄土三部經の内、特に觀經は文学的にみて実に絢爛たる文章であると感銘しています」

という返事をいただいた。

× × ×

吉田絃二郎先生は、昭和十二年七月に明枝夫人を亡くされ、これが機縁となって、その後の浄土に戦災を受けるまで毎号欠かすことなく寄稿して下された。当時の先生の日誌には次のように記されている。

六月十八日 晴 病人いたく苦しむ。呵雪国手見えらる。夜っびて温湿布。指の先皮膚ただれ痛めども、われにかわ

て湿布を取り替えてくれる人もなし、妻一人、夫一人なるものの生活のあわれさを思ふ。

六月二十一日 晴 病人朝苦痛を訴ふ。今日、初めて部長の診察あり、午後は大分落ちつく。客を待つために夜ふたたび家に帰る。

「寂しい」と妻はわたくしに訴へる。

六月二十二日 晴 プラタナスの下で仔犬が鳴いている。妻は武蔵野の家に遺して来た二匹の犬のことを気にしてはたづねる。病人は牛乳少しと果汁少しを摂取するのみ。

玉はこの道はるはると旅を来し二人なりしをししみ思う。六月二十三日 晴 今日も十回余の注射。夜に入りて苦しみもがく。妻は氷のかけらを入れた番茶をくれといふ。われを拌み氷のかけら飲みたいといふ妻あわれせんすべもなし

夜更けて薄い電燈の光りに妻は手を出しては爪を見ている。

わが涙見付けぬまでに衰へし妻をし見ればかなしかりける。六月三十日 雨 朝の中、西原氏からいただいた花を見せ「わかるか」といへばまことにやさしき微笑を洩らす。中根

氏より電話あり、電話の前に立てと言葉出でず。夕刻より真夜中まで観音經を誦む。

七月一日 雨寂し 午前五時ごろより急変。われ名を呼べばかすかにうなづくのみ。六時五十三分、四十七年の生涯を静かに終る。

絃二郎先生には檀那寺がなかった。下伊豆修善寺を愛していた先生は旅館菊屋の裏山に墓地をとることを楽しみにしていた。しかし夫人の遺骨は夫人の部屋に安置したままであった。茶屋づくりの離房のその部屋には、夫人の鏡台やその上の化粧品にいたるまで生前のままでその位置すら変わっていなかった。

先生に原稿をお願いするには、切の日を伝えておけばよかった。その日になると脱稿したから誰か来るようにとの電話があった。部員が参上すると必ず茶菓を用意して待っていて下さった。時にはわざわざネクタイを買っておいたり、また季節には自ら裏の竹林で筍をとってお土産に下さった。夏になると軽井沢の別荘に招待して下さった。

「自分は真宗では安心が得られない」

とはよくいっておられた言葉であった。何しろお一人だけから来客を大事にされた。月に一度参上するのだが、話題をそれからそれへと変えて少しでも長く引止めようとされた。

さて帰ろうとして、目の前にあるお茶をのみほすと、間髪を入れずに

「お夏さん、お茶を……」

と台所の方に声をかけられた。注がれたお茶をのみほして帰ろうとする気配をみせると

「お夏さん、お茶……」

といわれる。その茶椀たるや普通のものの二倍もあるという大きさである。これにお夏さんが満々と注いでくれるお茶が、温くて薄い番茶であった。何杯も飲むお客にはお夏さんも閉口したろうが、これをまた全部呑む方も有難くないことであった。

変貌する創価学会

浄土宗教学局編

著者……竹中信常・安居香山

宮林昭彦・藤井正雄・芥川博道

最近の創価学会の動向が一目で分る必見の好著

定価 一五〇円 千 四〇円

(三〇部以上おもとめの際は割引いたします)

◎本会にてお取次いたします

縁

幸田文



自分がいま着ているのとそっくり同じな着物をきたひとが、あちらはこちらに気付かず、すすすつと歩みよってくるのを見たときに、どきつとして、咄嗟にどこかへ身をよけたいような、ひどくうろたえた思いをしたことがある。

この記憶はかれこれもう四十年にもなるのだが、忘れがたくいまも時折おもいだす。虚をつかれたというか、急にかつとしたというか、とにかくなんともいえない嫌な気持がした。帰宅したあとまで不愉快だったので、ついそのことをしゃべると「自分に対面したな」と父親に指摘された。着物という形のなかだちを置

いて、不意に自分が自分に出逢ったのである。そんなにぎょつとしたのだというの意に思いもかけないことをいわれた手応えがあり、強い刺戟だった。刺戟をうけたということは、言われたことを納得したからこそ、刺戟されもしたといえる。

おもえばそのひとは、ほぼ私と同じ背たけがあつて、頬骨のたかい感じの顔、歩幅が広く、ただ少しむこうは痩せ型、私のほうが骨太だった。着ていたものは大島の紺なのだが、裾まわしのえんじ色もそっくり、帯も同じように赤っぽいの

信仰は釣鐘をつくよう

故道重大僧正

信仰は釣鐘をつくようなもので巧劣はこちにあるが、鐘のなるのは同一である。学問や智慧や才覚ではない。至心に一向不乱の一心専念にやればよいのであります。信仰の境地は実は「冷暖自知」と申して人に問われず、人に話せず問わず、語らず、聞かず、話さずのものじゃから、信仰を語ったり、聞くより本当は自分が先ず実地にやるより外はない。

笑っている魚

朝倉文夫

私は釣りが好きでよく出かけますが、決して怒っている魚は釣り

をしめていた。落ちついて考えれば、なにも驚くにはあたらないことなのである。似たような背恰好や顔つきのものが、同じ柄のきものを選び、裾まわしや帯のよくな附け足しの小物まで似たようなのを使うのは、むしろ当然なことかもしれない。私が好んだものを、私とからだつきの似ている彼女もまた、好んだのだらう。

別にどうということはないのである。

それなのになぜそんな、身をよけようなどというあとじさりなことを思ったのだろう。ふと自分の姿を見る、自分によく似たものを見る、というのはそんなにぎょっとすることだったか、と改めて知らされたのである。同じ柄を着ていたあのひとを私は、縁だとおもう。もとよりそのときだけの一度のひとで、頬骨のたかい感じと歩幅の広いということのほかは、今はもうこまかい目鼻だちなどはす

っかり忘れているけれど「一番こわいのは自分に対面することだ」と知る機縁になつてくれたあのひとは、私にとってなんと縁の深い人だったかと感謝している。

時によると、あのとき年頃もほとんど同じと見たから、きっと何処かにまだ健在で、これまでに二枚、三枚、お互いを知るよしもなく同じ柄の着物をきていたとは限らない、などと思ったりすることもある。その後は同じきものの人に出逢ったことはないが、今後もしまたそんなことがあって、またまたあの時と同じようにぎょっとしたとしても、あるいは私はぎょっとせずに、相手のほうがぎょっと避けようそぶりを示したにしても、私はそのままは行き過ぎるまいと思うのである。

声をかけて、過去四十年の縁を更に新しくいい縁に結ぼうと思う。

ません。笑っている魚ばかりを釣って来るのです。無理をしないで釣り上げた魚は笑っていますが、無理をして釣った魚は怒っています。そういう魚をつる人は釣道の邪道ですな。何処で解るかってそれは魚の表情にちゃんとあらわれています。

詩 一 つ

佐藤 春夫

うらやましきは人ならず
西方の宝池にありて
あそぶてふ鶯鶯なれや
鳥の身もうへ
妙法をぞ説けりける
南無阿弥陀仏

(浄土創刊号より)

福田 闡正 僧 正

高 橋 良 和

(中外日報社取締役)

この間、福井の加藤照山さんに逢ったら、愛知県布袋の善光寺の福田カメオさんが後任住職に誰かきてくれないか、高橋さんにたのんで中外に書いてもらって欲しいという伝言があったのである。加藤さんに福田さんの未亡人がわたしのことをまだおぼえていらっしまったのか聞くと、そのとき加藤さんは、いやたしかにあんたのことをいつていたからよろしくたのみますぜということ、早速このことを中外の浄土宗雑記の欄にかいたら、加藤さんから再び連絡あつて、効果できめんで何人かの後人住職の希望者があつて、福田さんの未亡人よろこんでいらっしまったという話を聞いたのである。

後任の選考はわたしの責任ではないから、福田さんの未亡人が適当な方を選らばれるとよいのである。

そこでこの福田さんの未亡人というのは一体誰の夫人であるかという、この主人が、海外でほとんど一生をおくった福田闡正僧正である。福田僧正は若くして海外開教に飛び出し、満州、台湾そしてハワイに赴き、ハワイではホノルルの浄土宗別院の本堂の新築に着手し、浄土教団としての機構を整えたのであるが、そのハワイに在任中は、ハワイ開教監督として大きな功績を残したのである。

そうして功成り、名遂げた福田僧正はその後愛知県布袋

の自坊にかえったのであるが、内地の寺に腰をおちつけるほどこの人はゆっくりした人でないので、その後日華事変がはじまると共に再び海外に赴き、中国で宗教による日華両国の親善事業に力をつくしたのである。

とに角生れつき性格は豪放であつたから内地のまどろっこしい隣り近所のうるさい附合いは不慣れだららしいのである。

いうことが、全くスケールが大きくなって、一寸狐に鼻をつままれたような感じであつたから、海外では実に人うけがよかつたのであるが、内地では大風に灰を撒いたようなことになって、ちっぽけな内地のお坊さんたちを煙にまいてしまったものである。

酒は斗酒なお辞せずというから、何升呑んでも顔色一つ変えなかつたのである。アルコールの一滴も呑めないわたしの案内で京都の街を呑み歩いたものである。

この僧正の寺は布袋というところであるが、なるほど布袋の名のごとく、この僧正は全く布袋腹であり、どっしり坐つて、着物を合わせた間から腹でもみせようものなら、全く布袋和尚そっくりである。唇は厚くって、下唇が前につき出したように眉は太く特長のある顔つきであつた。

この福田僧正の話によると、自坊の布袋の善光寺は、こ

の僧正の先代が在俗の人であつたのが、浄土宗に帰依したので自分で住んでいる家をそのまま寺号を公称して、善光寺と名付けたということ、無檀、無祿の寺であるということである。

お寺としては貧乏寺であるかもしれないので、それがこの僧正をして海外開教に眼をむけしめた理由であるかもしれないのである。

僧正の開いた寺は満州にもあるが、残念ながら今はどうなっていることや、然しながら海外開教ということになると、なんとしても福田開正という名を忘れることが出来ないものである。

ハワイ開教に明治二十九年に渡布した山口の白石堯海氏が最初であり、その後全島に十七カ寺が存在しているが、福田僧正のような方が、あのハワイで教勢拡張にあたられたればこそ、今日の盛大さになったのだといえるのである。

夜通し呑んでも一寸もくずれない酒のすきな人であつた。然し非常に人情家である一面もあつた。

この僧正が今生存していたら、一寸海外で面白い事業がうんと出来ただろうと思うのである。未亡人の福田カメオさんに一度逢いたいと思うが、きつといい主人でしたといわれるに決まっているだろう。

念仏は人類の主流的結論である

七 条 晃 正

(仏教大学講師・医博)

昨年八月号に「科学と念仏」の題を課せられて一文を寄せたことがあった。その小文では三つの点に触れて所感を述べたのであった。第一は、人間の精神機能を一応、知的な傾向と情意的な傾向とに別けて考える時に、人生に於ける個々の問題について、これを知的に扱うものは科学であり、情意的に扱うものは芸術であり、人生そのものを全体として知的に扱うものは哲学であり、人生そのものを全体として情意的に扱うものが宗教であるということ判然としておく必要があるという点であった。第二は、従って科学と念仏とは次元の異なるものであるが、強いてこれを結びつけるならば、念仏は人生を全体として解決する生き方の問題であり、科学は念仏に奉仕すべき役割を持つものであるという点であった。併し、私の最も言いたかったことは、

小文の冒頭に「私には特別の動機もなく、特別の回心もない」という点であったが、これはおそらく読者には気付かれないで読み過ぎられてしまったことと思われる。これが第三の点である。世間一般には、念仏往生というような宗教的境地は、特別な人……例えば法然上人のような……が特別の動機……例えば無常感とか罪惡観とかというようないくつかによって求道の結果、特別な宗教的回心……例えば捨聖帰淨というようないくつかによって到達するものであると考えられているようである。ところが、私の考えは、特別な人が特別な動機により、特別な回心によって到達する境地ではなく、普通の人々が普通に精神的發達を遂げれば、必然的に念仏往生の結論に到達する外はないというのである。その意味を、私は念仏信者であるが、私には特別な動機も特別な

回心もないと言い現わしたのである。この第三の点について言い放してほっておくのも無責任なことであるから紙数の許す範囲で私の意見を述べておきたい。

地球の上に生物が存在した痕跡は大体三十億年前まで溯ることが出来るから、地球の歴史は四十五億年位ではないかと言われている。生物の起原はオパーリンの学説が大体認められている。とすれば私の生命というものは三十五億年の歴史を持っているのであるが、私には子供がないから三十五億年の生命は私の一代を以て断絶するのである。と思えば一抹の感懷なきを得ないが、併し人類の生命は今後もなお長くつづいてゆくものである。さて、個體發生は系統發生(宗族發生)を短縮した形で繰返すと言われているが、人間は、単細胞の受精卵細胞から哺乳動物の到達した段階までの歴史を母の胎内で二百八十日の間に繰返して、哺乳動物の新生児として地上に誕生するのである。これから数年の間に、人間以外の哺乳動物の持っている脳の皮質の外側に、人間独自の脳の皮質を生じるので、これを「新しい皮質」と言うのである

が、この「新しい皮質」の活動によって他の哺乳動物……その最も高等なものは類人猿であるが……と異った人間と言う動物が出来るのである。

ここで注意を要することは、世間一般には人間はあらゆる生物の中で最も高度の発達変化を遂げて人間になったものであると考えられていることである。併しこれは大きな誤解である。人間の属する霊長類という哺乳類は実は、食虫類……例えばモグラモチ……の様な極めて原始的な動物と近縁関係にあつて、その発達変化は案外に原始的な姿態をそのまま保存しているものである。それではどうして人間がこの地上を制覇する動物に発達することが出来たかと言えば、それは生物の「主流」として発達したからである。その契機となったものは三つ挙げられている。第一は強力な武器を持たなかったこと。第二は早く昼間活動に移ったこと、第三は混食であつたと、この三つの理由によって人間の神経系統は他の動物よりも急速に発達することが出来、それによって生物界の主流的地位を占めることが出来るようになったと言われている。

のである。空を飛ぶことにかけては蝙蝠の方が高度に発達しているし、海を潜ることにかけては鯨の方が高度に発達しているが、それらの特殊分野における高度の発達とは反つて生物としての主流的発達を阻碍し、特殊な高度性を持たざる人間に主流的地位を譲らざるを得なかったのである。私はこのような生物界の長い進化の歴史から、人間の歴史を回顧するのである。医学的に見ると、一応、人間の活動は身体的活動と精神的活動に分けて見ることが出来るが、この活動が良好な状態を健康といい、活動が阻碍される状態を病的という。従つて人間を特徴づけている精神活動にも健康な状態と病的な状態とを分けることが出来る。人類の歴史を發展せしめて来たものは健康な精神活動であることは言うまでもない。この健康な精神活動を指導し方向づけて来たものは何であろうか。これを生物界全体の歴史と人間の歴史とに鑑みるに、人生全体を全人格的に最も良好な状態にあらしめんと志向した指南力である。この指南力をいろいろに解釈する人もあろう。またいろいろに言い現わす人もあろう。それはそれでよいので

あるが、「選択集に於ける選択行の解明」を卒業論文とした私の立場から言えば、因位に約して言えば法蔵菩薩の本願力であり、果位に約して言えば弥陀如来の本願成就である。史上の人間としてこれを指摘した人は釈尊である。宗教としての仏教の發展發達を顧みるに、哲学として高度に發達したのもあろうし、咒術として高度に發達したのもあろう。併しそれらは高度に發達することによつて反つて宗教としての主流的立場を捨てたものである。その中にあつて、主流として發達したものは、あくまで無量壽、無量光を志向してひたすら歩みつづけた念仏の教であつたのである。それは特殊な人のためのものではなく人類全体のためのものである。それは特殊な行ではなくひたすら無量壽無量光を志向することそのこと自体である。特殊な心理経験ではなく、自然の帰依の心である。私が、私には特別の動機も特別の回心もないと言うことは、一見、奇矯の言を弄する如くであるが、帰命尽十方無碍光如来、南無不可思議光如来、帰命無量壽如来、南無阿弥陀仏は、自然にそなわつた人類の主流的結論である。

すばらしい祐天の法力(三)

松崎仁三郎
中島正方

祐天の法難

延宝二年二月祐天(三八才)は、土浦常福寺からの懇望によって、入仏供養說法僧となり一七日間つとめた。爽やかな弁舌は、大衆の心を奪い、平易な事例を引いて教理を説いたから、人気は日増しに上り、授くる十念護符によつては、難病奇病が平癒したので、群集した参詣人は驚きの目を見張った。特に水戸家の郡奉行深谷源左エ門は、亡妻の靈を成仏させて頂いたので、これまでの日蓮宗をこの宗に改め、深く念仏に帰依した。すると、之に習う者も多くなったから、日蓮僧徒からは極度に怨まれ、彼等の申すには、

これは、かの小坊主のした事が、利益があったから、わが宗の光が薄らぎ、浄土宗に

変る者さえ出来たのであの祐天を生かしては今後が思われる。今日は結願だから彼の帰りを待ち伏せて、どうしても殺してしまふより外はない。

と、同宗の僧を三四十人狩り集めた。

結願の日、祐天は大役が上首尾に終わったので帰ることにしたが、勿論日蓮僧徒のたくらみなどは露知らず表門参詣の群衆で立錫の余地がないので、止むなく裏門から出かけた。

若し表門にすると、日蓮僧徒の難に逢ったのであるが、偶然にのがれ得たのは不思議である。これを知った日蓮僧徒は齒ぎしりかんで残念がった。しかし、まだ遅くはあるまいと必死に跡を追ひ、やがて追いつこうという時、不思議や今迄が晴天だった空が俄にかき

曇り電火は眼をくらまし、大雨は車軸を流して大風は大木を折る有りさま、彼等は恐れおののいて立ちすくんだ。しかも向う側には小川があり、増水して危険である。どうしても引き返すより外はない。祐天は唯一途に歩いていると後から声をかけて呼びとめる者があつた。祐天は立ち止って、

どなたですか。私をお呼びになったのは？と、その方は

あれをみよや、あれを。

と、土浦の方角を指された。なる程黒雲が荒れ廻つていて物凄く有様だ。祐天は雷かたらずねると、

いや、いや、そうではない。汝が危き難を辛うじて押えたのだ。

と、右の事を一々物語ってくれたので祐天はびっくりした。

さてさて、有り難い事です。してあなた様はどんな御方ですか。

すると、俄かに人の姿が現われて、

われは、成田山に住む不動明王だ。汝の難を見るに忍びず、追手を防いだのだ。

と、あらたかな声だけが雲間に残つて、お姿

は見えない。祐天は、夢からさめた様に、

ああもったいない不動明王様

と、御跡を伏し拝み、感謝しながら飯沼さして道を急いだ。

久保田伊織の発心

祐天は、途中の危難をまぬがれて、無事に飯沼へ帰って来たが、勘当中であるので内々に寺務所へお届けした。すると役僧は、

貴僧堅固にお帰りなされて、まことに重疊至極です。時に貴僧の寮へ浪人体の者が六七人、用事があるとか言つて、今朝から来て待つて居る。どんな子細かわからんが、一寸気がかりです。

と申すと、祐天は、

なる程心当りがあります。それは土浦で説法の折に、問答に参った儒者久保田伊織と申す者でしょう。隠れない学者だそうで、連れて来たのはたぶん弟子共でしょう。しかし少しも心配にはなりません。

と、とても落ちついたものである。

それならばよろしく取り計らつてくれ。しかし、儒者とあつては、必ず一問答はされるでしょう。決して粗忽には参りますま

い。若し貴僧が万が一にもお負けにでもなつたならば、それこそ大變です。方丈の恥辱は申すに及ばず、一宗の恥ともなります。これは、いっそのこと逢われない方が無難でしょう。

と、色々止めたのでしたが、祐天は、更に聞き入れる様子もなく、

必ず御案じ下さいますな。決して師匠の御名を汚す様な事は致しませんから。

と、自信たつぷりな申し振りで。

それならば、この山で四天王と言われる、白りん、貞れい、敬善、これらの人を遣わしましょう。一面証人ともなりますから。

と、祐天は寮の戸を開いて、

祐天只今帰つて来ました。役所で承りますと土浦から伊織殿お出での由、さぞさぞお待ちかねでしたでしょう。

と、祐天ならびに四人打ちつれて中に入つた。

伊織は、一礼して、

お約束でしたから推参致しました。又この者共は、拙者の弟子ですからよろしくお見知り置き下さいませ。

と、物言い振りはまことに丁寧である。祐天は、

この前、説法の座で何か御不審の事がおありになり、問答致したいとかの仰せでしたが、それはどんな事ですか。

と、それを聞いた伊織は、座を進めて、貴僧は、稀代の名僧で、学問道德深遠な業に、皆挙つて尊敬致して居りますが、今ここで、不審に思うのは地獄極楽の事です。これは、まことにあるものでしょうか。

と、申した。祐天は、

それは確かにあります。あなたは、どう思われますか。

と、伊織は、

地獄極楽は、この世にあるのです。例えば、親を害するとか、又は、堂を焼く様な類の者を、之を科として、時の將軍なり領主地頭等が、之を取り調べ、その罪の軽重によって、刑を行なうのは目前の地獄です。金銀財宝を多く貯えて、心のままに遊び楽しんでゐるのは極楽です。つまり地獄極楽は、この世の中にあつて外にはない。人は、天から性をうけて、五行を一体に、

死するとその元にかえるのです。外に魂があつて、此所彼所とさまよい申すものですか。

と、祐天は、

弥陀の誓願に、十方世界念仏衆生とあるのは、世界の万物を皆救い取ろうとされて、四十八願を立てられたので、一度願をかけたならば、必ず極楽へ成仏させて下さるのです。その外、諸經に惡道の衆生の事を説き示され、念仏の衆生の事は、一切經の中に弥陀經を説きなされ、末世濁世の衆生は、法智力では成仏できない。念仏でなければ叶わないと言って、舍利弗を三千度まで呼び出して、ねんごろに示された。それであるから地獄極楽がまことにあることは、これを以てもわかる。私は一切經を証拠として申すので、どうしてかみ仏に偽りがありましたらう。

と、そこで、伊織は、

なる程、一切經という仏書には、地獄極楽があると書いてありますが、目前には何のしるしもない。又死んで二度と娑婆へ立ち帰って来て、物語りした者も聞いた事がな

い。仏事を証拠となされますが、それも弥陀や釈迦の自筆でもありますまい。之は、世上は人をあざむく渡世のための草紙なのでしよう。地獄極楽が外にないという事は、明らかではありませんか。

と、祐天は、

一切經計りでなく、あらゆる書物を証として私がかく申すのにお信じなされない。それでは地獄餓鬼畜生修羅人間天、この六つの中から先ず二つの証拠を見せましょう。この世の中で、仏法さまざまの行力修行をし、或は、念仏三昧に心を堅めて、未來の大事を願う。この善根の品によって上品上生中品中生下品下生を得て、或は、人間に生れ又は鹿に生れる。これは、念仏の輕重によつてである。人生に四苦八苦ありとされるが、若し畜生と生れたならばそれ以上の苦しみがある。つまり地獄極楽餓鬼畜生は、目前にその証拠は見えないが、人間界畜生界を以て明かである。あなたの宿に、年久しく飼っている斑の犬がいるでしょう。之は、あなたが十一才の時に、死別した母親です。あなたはそれを知っていま

すかどうか。

と、伊織は、心の中で

私の飼っている犬の毛色迄さして言うとは、さても不思議な坊主だ。

と、聊か恐れを抱いたが、今この私の母を畜生と申すのは、問答につまづいてこんな恥辱を与えたに相違ない。まことに聞き捨てならない。そうだ。その証拠を見せて頂こう。答によつては覺悟して下さい。

と、強くつめよった。しかし、祐天は少しも驚いた様子もなく、

御尤です。証拠をお見せしましょう。どうかその犬を連れて来て下さい。

と、伊織は、弟子に命じて彼の犬を連れて来させ

どうか、一時も早く。

と、言葉も聊か荒々しくなった。祐天は、珠数押しもみ、十念を授けられ、

そう急かんでもよからう。それでは、之に食物を与え給え。伊織殿も。親子のしるしを、必ずお見せ申すから。

と、それで、各々が小さい握り飯をやると、犬は、尾を振って食い初めた。すると、伊織

の顔を見、高々と泣いて、両足を折り、しきりに涙を流し、与えられた食物を一切食べない。そして、顔を見上げ見下して、涙をとめどもなく流している。その時、祐天は、

伊織殿、これでも偽りだと思召されるか。どうです。

と、申した。さすがの伊織も、あっけにとられてしまった。今眼前に、物は言わないが、斯様な有様をして泣き、足を折って、さもなつかしそうにしている所を見ると、

真にわが母の生れ替られたのに違いあるまい。斯様な名僧の高い徳で唯今この業因を顕わされた上からは、疑い申す訳に行かない。しかし、母上はどうして畜生に生れ替られたのでしょうか。

と、涙ながらに膝に引きよせ、抱き上げて悲しんだ。犬は涙を流し、一声泣いては顔を上げ二声泣いては憂を催す。その有様は人間より以上だ。祐天は、

どうです。これで貴殿の疑いは晴れたでしょう。この上は、今宵の中に成仏させましょう。

と、犬のために、夜中ではあったが、念仏を

始めた。伊織を始め居合せた弟子等と八九人、祐天迄が皆車座になって、一心不乱に念仏を唱え、その座の真中に犬を入れ置いて、丹誠をつくした。已に夜も深更に及んだ時、犬は、しきりに首をたれ、人が念仏を申すような格好をした。祐天は、

犬の成仏は唯今です。

と、犬は、祐天が唱えられる十念を受け終って、スッと立ち、身を振わせて、そのまま息絶えた。伊織は終始涙にくれていたが、

かく有り難き御道德、わが母も畜生道の苦しみを受けられたが、御利益によって、人間も及ばぬめでたい往生が出来ました事は、有り難く忝けない。かように尊い名僧に向って排法問答を申し入れました事は、本当に誤りで、誠に申訳ございません。

この上はお弟子となって諸国修行いたし、母の菩提を弔います。

と、願った。祐天は、

斯く因果の道理を見られては、最早疑う余地はないでしょう。よろしい髪をおろしてあげましょう。実は貴殿が心の中に仏法をひるがえそうとなされたためか、昨夜不思議に夢で貴殿の母親が畜生に生れ替って

いるのを知り、それが念仏の徳によって成仏した。それでは何時迄も猶予すべきでない。よろしく未来は一蓮托生を願われな

と、様々の伝授があり、剃髪の式もすんだ。

伊織は、名を祐山と改め、彼の犬は母親の死骸と違って、葬礼を営み、懇に弔った。祐山は、調度を整えて諸国修行に出、祐天の大徳を世上に広むると共に、母の菩提を弔った。

祐山は後に伊予国（愛媛県）松山の領主隠岐守の菩提所大安寺で、大往生を遂げた。

定評ある講談社の

世界美術大系

お部屋に置くと常に新鮮な鑑賞を随時に充されます

全二十四巻十五回の分割払あり

定価 六〇、〇〇〇円

全巻納入し、豪華な書棚を

（無料）差上げます

東京都千代田区九段一ノ四

蜂谷ビル

東京優良図書協会

電（二六一）八〇〇三

「学生の分際で、伝道などというおそれ多い言葉を使うな」とお叱を受けるかも知れない。あらゆる方法と効果を研究し、私達なりのそれを行っているつもりである。お許し願いたい。八月四日十時竹芝を出発した。団員は白幡、岡村、金子、和田、浜村、青山君と私の七人である。連絡の不手際で、大島元町の潮音寺（浄土宗藤井住職）の一会場のみとなってしまうことは、誠に残念であったが、ともかく、五日早朝元町潮音寺に着いた。それはそれとして、宗務支所の新谷先生からの依頼をもって私等は伊豆諸島の巡教を望まれた。団員の都合もあり、今回は大島のみとしたのである。元町潮音寺藤井住職は、熱意のある宗教活動をされていて、我々の微細な力が何になるかと思つた程であつた。五日二時より子供会を催した。八十名近い子供会となり大成功であつた。岡村君、児童研究部員よろしく、ゲームにフォークダンスに、仏様のお話しに努めてくれた。「ドンファラプッフアードンファラファッブアー、ブアーラ、ブアーラ、ドンドンドン」の拍子によつて、子供達を仏法の聖域に引込んでくれた。

伊豆大島伝道

田 中 祥 雄

（大正大学浄宗会補佐）

それに合せ浜村君はオルガンの先生である。誠に調子よく仏讃歌、歌指導をやってくれた。夜は七時より成人対象とした宗教座談会を行つた。参加者は二十名程であつた。この元町は本年一月大火にみまわれ三百戸の家が焼けた。重苦しい状態の中に「心のよりどころとなるもの」を、又心の安らぎを求められる人々のみであつた。参加者皆さんが口をそろえていわれることは大火の苦るしかったことである。ある長老は、「私も八十近くまで生きてきたが、こんな大火は初めてだ。大正十三年に六十戸焼けたが、その時は元町の鎮守の神さまは火の子一つ入らなかつた。しかし今度はちがう、それも全部焼かれてしまつた。何たることだ山からキジが飛び出ると大火が起る。しかし今度は飛んでこなかつた。私は寝てもさめても思うことは一つ、大火のことだ」と云われた。三、四十米の風にあおられた火は元町のほとんどを焼いてしまつたのだ。こうした島民の現実と迷信と不安の葛藤する心をとぎほぐすことは容易なことではない。座談会の中に幸いにも死者の出ていなかったことを私共は強く強く話したので

ちこんで生きてゆけ、という気持であつたろうと受けとるべきである。つまり、人生を歩む一步一步、常に辞世や遺跡となるつもりの仕事ぶりをすすめているわけである。

プロ野球の公式戦もいよいよ終幕に近づいたが、名投手といわれるほどの選手は、いついかなる場合でも、一球一球を慎重に考えて投げる。長いペナントレースの間、どの試合に出されても、必ず一球ごとに勝負の気力をこめることを忘れない。世に思い出の名試合だったとか、あの一球で負けたのだとか、とにかく印象に残るゲームや選手の姿を、後になつてすぐ脳裏に想い起せるのは、その当時のチームのあり方が、たまたま辞世的遺跡的に真剣そのものであつたからである。

人生は、まことに真剣勝負である。うかつには一日一時、いな寸秒もすこせないほど、きびしい試練の場である。一挙手一投足が、すべて一生の大事にかかっている。それほど大切な瞬間のつみ重ねを、人々はあまりにもみすみすとむだに過していることが多くないだろうか。かりに今すぐお前の辞世は何だ、遺跡はどこだ、と誰かにきかれて、直ちにこ

れこれだ、と即答できる人は何人あるか。答えられないのも無理はない。芭蕉や法然のように、人生の一步一步を、ゆるがせにせず、一息一息のいのちを大事にしていけないからである。つまり、辞世や遺言は、死ぬ間際になつてからでいいとか、死の直前だからその価値も重く見てくれるだろうとか、いい加減に死というものを軽く見ている証拠である。

しかし、死はそんなに甘いものではない。生死の境は一瞬である。悠長に辞世や遺言を考えている暇などないほど、無常迅速である。だからこそ、平生即臨終の心構えが、強く尊く要求されるのである。正月元旦や誕生日に遺言を書くことを提唱している人もいるが、それくらいのは覚悟は当然しておいて損はない。世間ではめでたい日に縁起でもない、とまゆをひそめる友人や知人も多からう。しかし、いざ真剣に遺言を書こうと思うと、容易にすらすらすとは書けないのが凡人の悲しさで、あれやこれやと迷いあぐねて、結局は一日のぼしにしたり、やめたりすることが多い。その点、臨終の頃なら仕方なく、いろいろ言い遺しやすいことは事実である。またそ

れだけ真剣にもなれる。しかし、前述したように、死の縁は無量あり、死の領域はいつでも生のとなりにある。遠くて近いものは、極楽、舟の道、男女の仲だと、名言を吐いたのは清少納言であるが、昔も今も、その真理に変わりはない。辞世を崇め、遺跡に遊んで師を慕い憧れる風習も尊いにはちがいないが、たとえ一時でもその師と生前さながらの交流をもてたら、もっと尊く、ありがたいことではないか。それには、いながらにして魂の憩える平生即臨終という教えがある。真剣に句作するところ、そこに芭蕉がおり、念仏の声するところ、そこに法然がいますからである。

とにかく、一寸の光陰軽んずべからず、一刻一刻を、もっと有意義に、大切に、そして真剣に過すことを忘れないで生活すれば、辞世だの遺言だのと騒がなくても、到るところに安心立命の生き甲斐がある。そして「生けらば念仏の功つもり、死なば浄土へ参りなん。とてもかくてもこの身には、思い患うことぞなき」という法然の心境に、いつしか安住することも不可能ではないのである。

平生即臨終の覚悟

宝 田 正 道

(中央公論社編集・宣伝技術部長)

きのふの発句は今日の辞世、けふの発句は明日の辞世。われ生涯いひすてし句、一句として辞世ならざるはなし。若しわが辞世は如何にと問ふ人あらば、此の年頃いひすて置きし句、いづれなりとも、辞世なりと申したまはれかし。

―芭蕉『花屋日記』

これは、有名な俳聖芭蕉が、臨終の際、弟子の申し出に応じて答えたと伝えられる言葉の一節である。『花屋日記』の真偽はともあれ、芭蕉の生涯やその思想行実から考えて、いかにも文学の絶対境を拓いた人らしい名文句ではないか。

古今の名匠といわれるほどの人には、大抵辞世の和歌や俳句、その他何らかの遺言風の書や言葉があるものである。その例にならって、高弟の去来らが尋ねたに對する返事が、一々の句々すべてこれ辞世である、という一言である。芭蕉という人が、いかに一句一句真剣に句作に對処したかがうかがわれると

もに、彼の作った一句ごとに、心血を注いだ生命の重みを感じられて、尊い気がする。

宗祖法然上人にも、この芭蕉の心境と似たような事蹟がある。読者はすぐに思い当たれると思うが、やはり病に臥して命旦夕に迫った時、門弟の法蓮房信空が、古来の先徳にみない遺跡がある、師の入寂後はどこをその遺跡とすべきか、と尋ねたに對して、上人が答えられた有名な言葉が、それである。

あとを一廟に占むれば遺法あまねからず、予が遺跡は諸州に遍満すべし。…されば念仏を修せんところは、貴賤を論ぜず、海人漁人がとまやまでも、みなこれ予が遺跡なるべし。

まことに、符を一にしたスケールの広さではないか。芭蕉は歴史的に一作一作を辞世といい、法然は地理的に念仏の声するところをすべてこれ遺跡なり、と断言した。

要するに芭蕉や法然にしてみれば、臨終に際して何も特にいうことはなく、平生即臨終の心がけで、一句一句、一声一声に全霊をう

ちこんで生きてゆけ、という気持であつたらうと受けとるべきである。つまり、人生を歩む一步一步、常に辞世や遺跡となるつもりの仕事ぶりをすすめているわけである。

プロ野球の公式戦もいよいよ終幕に近づいたが、名投手といわれるほどの選手は、いついかなる場合でも、一球一球を慎重に考えて投げる。長いペナントレースの間、どの試合に出されても、必ず一球ごとに勝負の気力をこめることを忘れない。世に思い出の名試合だったとか、あの一球で負けたのだとか、とにかく印象に残るゲームや選手の姿を、後になつてすぐ脳裏に想い起せるのは、その当時のチームのあり方が、たまたま辞世的遺跡的に真剣そのものであつたからである。

人生は、まことに真剣勝負である。うかつには一日一時、いな寸秒もすこせないほど、きびしい試練の場である。一挙手一投足が、すべて一生の大事にかかつてゐる。それほど大切な瞬間のつみ重ねを、人々はあまりにもみすみすとむだに過していることが多くないだろうか。かりに今すぐお前の辞世は何だ、遺跡はどこだ、と誰かにきかれて、直ちにこ

れこれだ、と即答できる人は何人あるか。答えられないのも無理はない。芭蕉や法然のように、人生の一步一步を、ゆるがせにせず、一息一息のいのちを大事にしていけないからである。つまり、辞世や遺言は、死ぬ間際になつてからでいいとか、死の直前だからその価値も重く見てくれるだろうとか、いい加減に死というものを軽く見ている証換である。

しかし、死はそんなに甘いものではない。生死の境は一瞬である。悠長に辞世や遺言を考えている暇などないほど、無常迅速である。だからこそ、平生即臨終の心構えが、強く尊く要求されるのである。正月元旦や誕生日に遺言を書くことを提唱している人もいるが、それくらいのは覚悟は当然しておいて損はない。世間ではめでたい日に縁起でもない、とまゆをひそめる友人や知人も多からう。しかし、いざ真剣に遺言を書こうと思うと、容易にすらすらは書けないのが凡人の悲しさで、あれやこれやと迷いあぐねて、結局は一日のばしにしたり、やめたりすることが多い。その点、臨終の頃なら仕方なく、いろいろ言い遺しやすいくことは事実である。またそ

れだけ真剣にもなれる。しかし、前述したように、死の縁は無量あり、死の領域はいつでも生のとなりにある。遠くて近いものは、極楽、舟の道、男女の仲だと、名言を吐いたのは清少納言であるが、昔も今も、その真理に変わりはない。辞世を崇め、遺跡に遊んで師を慕い憧れる風習も尊いにはちがいないが、たとえ一時でもその師と生前さながらの交流をもてたら、もっと尊く、ありがたいことではないか。それには、いながらにして魂の慰える平生即臨終という教えがある。真剣に句作するところ、そこに芭蕉がおり、念仏の声するところ、そこに法然がいますからである。とにかく、一寸の光陰軽んずべからず、一刻一刻を、もっとと有意義に、大切に、そして真剣に過すことを忘れないで生活すれば、辞世だの遺言だのと騒がなくても、到るところに安心立命の生き甲斐がある。そして「生けらば念仏の功つもり、死なば浄土へ参りなん。とてもかくてもこの身には、思い患うことぞなき」という法然の心境に、いつしか安住することも不可能ではないのである。

平生即臨終の覚悟

宝 田 正 道

(中央公論社編集・宣伝技術部長)

きのふの発句は今日の辞世、けふの発句は明日の辞世。われ生涯いひすてし句、一句として辞世ならざるはなし。若しわが辞世は如何にと問ふ人あらば、此の年頃いひすて置きし句、いづれなりとも、辞世なりと申したまはれかし。

―芭蕉『花屋日記』

これは、有名な俳聖芭蕉が、臨終の際、弟子の申し出に応じて答えたと伝えられる言葉の一節である。『花屋日記』の真偽はともあれ、芭蕉の生涯やその思想行実から考えて、いかにも文学の絶対境を拓いた人らしい名文句ではないか。

古今の名匠といわれるほどの人には、大抵辞世の和歌や俳句、その他何らかの遺言風の書や言葉があるものである。その例にならつて、高弟の去来らが尋ねたに對する返事が、一々の句々すべてこれ辞世である、という一言である。芭蕉という人が、いかに一句一句真剣に句作に對処したかがうかがわれると

もに、彼の作った一句ごとに、心血を注いだ生命の重みを感じられて、尊い気がする。

宗祖法然上人にも、この芭蕉の心境と似たような事蹟がある。読者はすぐに思い当たれると思うが、やはり病に臥して命旦夕に迫つた時、門弟の法蓮房信空が、古来の先徳にみな遺跡がある、師の入寂後はどこをその遺跡とすべきか、と尋ねたに對して、上人が答えられた有名な言葉が、それである。

あとを一廟に占むれば遺法あまねからず、予が遺跡は諸州に遍満すべし。…されば念仏を修せんところは、貴賤を論ぜず、海人漁人がとまやまでも、みなこれ予が遺跡なるべし。

まことに、符を一にしたスケールの広さではないか。芭蕉は歴史的に一作一作を辞世といい、法然は地理的に念仏の声するところをすべてこれ遺跡なり、と断言した。

要するに芭蕉や法然にしてみれば、臨終に際して何も特にいうことはなく、平生即臨終の心がけで、一句一句、一声一声に全霊をう

ならないし、わからなければいやになってしまう。それには初重、二重、三重と、ことを分けて徹底し、分析的に論旨を裁然と区別して表示しなければ解ったことにはならないと思う。いつ初重が終り、いつ二重がはじまったのやら、一体五重とは一つのものやら五つのもものやら、もうぐじゃぐじゃになっってしまったて、てんで五里夢中なのである。

第二に行人との心の交流がないと言うことである。大乘經において、はじめから釈尊が大眾の前で自説を説かれると言う姿はまれで、やはり釈尊が經を説くにはその前提となるべき因縁があるのを常とするように、この五重においても受者の側より信仰上における悩みなり設問なりがなければならぬいし、それによって法説が進むのでなければ生きたものとならないと思う。ただ上から説かれることばを聞いておればいいと言う形式では自分のものとしてわかってこない。わからないと言うのは法説が一方的だから受身の姿勢に立たされどうして動きがとれなくなってしまうと言うことでもある。

法説は座談ではない。そこには自ら權威と高い格調が大切であることは言うまでもない。しかしながら私たちが日頃経験する現実の世界と、あまりかけ離れていては、それは講談と同じく他人ごとである。そこに話術の興味をつなぐとして我々の信心たり得ない。私はこんな所に悩みをもっている。

こんな場合があつて困ると言う具体例にふれてこそ、はじめて我が事となると思うのである。

このことの解決の道は、第一に五重相伝の前後においての信者の指導が適切になされなければならぬ事であろう。相伝に入る前に、最早相伝についての相当な指導が計画的に行なわれていなければならぬだろう。つまり予備知識が必要である——作法もある程度習得していなければならぬ。相伝後においては、そのおさらい復習がなされなければ全く元の黙阿弥となつて何ら得る所なく忘れ去られてしまう。その当時さえわからなかったものが、後々にわからうはずがないからである。

また、絵図、表示等によつて、できるだけわかつていただく積極的な工夫がなされなければならないと思う。聴視覚の近代的なものをできるだけとり入れて研究していただくの熱意がなければならぬし、受者の了解を何らかの形でたしかめて見ることも大切であると思うのである。

要するに五里夢中の境界より脱却することのできるあたう限りの努力工夫がなされなければ、今の時代の五重相伝としての興味も魅力も失ってしまうと思うのである。

五里夢中

五重相伝雑感 その三

渋谷 賢 応

茅野市仏教会会長

五重相伝が満行となりめでたく伝巻を手にはせられた方々にその感想を聞くと、異口同音に言われることばとして

「何がなんだかわからないうちにお相伝が終ってしまいました。」

実際専門家たる能化の私たちでさえ御随喜を一度や二度してもほんとうにわかったとまではいかない。余程ふみ込んで勉強し、見るものを見、当るべき儀式法会にも当たっていないと飲み込めないのである。ましてや身にしみて念仏したことのない、浄土宗の宗祖さまが弘法さまや法然さまや日蓮さまやわからないような信者の人たちが、一度や二度五重相伝を受けたからと言って、そうたやすくわかるものではないかろうと思う。よくこのことを善光寺さまのお戒段めぐりにたとえるのであるが、先も後もわからない真っ暗な所を、よ

うやくのことくぐりぬけたと言うだけで、何が初重やら二重やら、要偈やら密室やらわかったものではない。「よくたもつ」と言えと言うで言ったままでのこと、「究竟大乘浄土門」と言えと言うで言ったままでのこと、長いお説教と、足のしびれをこらえて木魚をたたいた思い出と、お礼拝で痛くなったりねとが残っただけで、信仰を、自分の身で考え、頭で掘り下げるなどと言うことは思いもよらず、勸誡の途中では専らうつらうつらとひと休み、密室道場の中は暗くてよいねむり場所と心得て、ねむり道場ときめこんでしまう。すべてがこんな人たちばかりではなからうし、またその中にも何ものかをつかんでもらうことができ得れば幸と思うのであるが、日々の疲れと不馴れから、思わぬ懈怠の姿となる例はめずらしくない。能化の立場として、これはあなたがち受者の不信心、不熱心とばかりは言いきれないものがあると思うのである。

第一にわからないと言うことである。愚頓念仏を第一の義とする立場に立てばわからないことの方が本義であってわかる必要がないことかも知れないが、それは信の段階におけることであって、やはりわかる程度はわかってもらわなければ

ならないし、わからなければいやになってしまう。それには初重、二重、三重と、ことを分けて徹底し、分析的に論旨を裁然と区別して表示しなければ解ったことにはならないと思う。いつ初重が終り、いつ二重がはじまったのやら、一体五重とは一つのものやら五つのもものやら、もうぐじゃぐじゃになっってしまったて、てんで五里夢中なのである。

第二に行人との心の交流がないと言うことである。大乘經において、はじめから釈尊が大眾の前で自説を説かれると言う姿はまれで、やはり釈尊が經を説くにはその前提となるべき因縁があるのを常とするように、この五重においても受者の側より信仰上における悩みなり設問なりがなければならぬいし、それによって法説が進むのでなければ生きたものとならないと思う。ただ上から説かれることばを聞いておればいいと言う形式では自分のものとしてわかってこない。わからないと言うのは法説が一方的だから受身の姿勢に立たされどうして動きがとれなくなってしまうと言うことでもある。

法説は座談ではない。そこには自ら權威と高い格調が大切であることは言うまでもない。しかしながら私たちが日頃経験する現実の世界と、あまりかけ離れていては、それは講談と同じく他人ごとである。そこに話術の興味をつなぐとして我々の信心たり得ない。私はこんな所に悩みをもっている。

こんな場合があつて困ると言う具体例にふれてこそ、はじめて我が事となると思うのである。

このことの解決の道は、第一に五重相伝の前後においての信者の指導が適切になされなければならぬ事であろう。相伝に入る前に、最早相伝についての相当な指導が計画的に行なわれていなければならぬだろう。つまり予備知識が必要である——作法もある程度習得していなければならぬ。相伝後においては、そのおさらい復習がなされなければ全く元の黙阿弥となつて何ら得る所なく忘れ去られてしまう。その当時さえわからなかったものが、後々にわかつたはずがないからである。

また、絵図、表示等によつて、できるだけわかつていただく積極的な工夫がなされなければならないと思う。聴視覚の近代的なものをできるだけとり入れて研究していただくの熱意がなければならぬいし、受者の了解を何らかの形でたしかめて見ることも大切であると思うのである。

要するに五里夢中の境界より脱却することのできるあたう限りの努力工夫がなされなければ、今の時代の五重相伝としての興味も魅力も失ってしまうと思うのである。

五里夢中

五重相伝雑感 その三

渋谷 賢 応

茅野市仏教会会長

五重相伝が満行となりめでたく伝巻を手になされた方々にその感想を聞くと、異口同音に言われることばとして

「何がなんだかわからないうちにお相伝が終ってしまいました。」

実際専門家たる能化の私たちでさえ御随喜を一度や二度してもほんとうにわかったとまではいかない。余程ふみ込んで勉強し、見るものを見、当るべき儀式法会にも当たっていないと飲み込めないのである。ましてや身にしみて念仏したことのない、浄土宗の宗祖さまが弘法さまや法然さまや日蓮さまやわからないような信者の人たちが、一度や二度五重相伝を受けたからと言って、そうたやすくわかるものではないかろうと思う。よくこのことを善光寺さまのお戒段めぐりにたとえるのであるが、先も後もわからない真っ暗な所を、よ

うやくのことくぐりぬけたと言うだけで、何が初重やら二重やら、要偈やら密室やらわかったものではない。「よくたもつ」と言えと言うで言ったままでのこと、「究竟大乘浄土門」と言えと言うで言ったままでのこと、長いお説教と、足のしびれをこらえて木魚をたたいた思い出と、お礼拝で痛くなったすねとが残っただけで、信仰を、自分の身で考え、頭で掘り下げるなどと言うことは思いもよらず、勸誡の途中では専らうつらうつらとひと休み、密室道場の中は暗くてよいねむり場所と心得て、ねむり道場ときめこんでしまう。すべてがこんな人たちばかりではなからうし、またその中にも何ものかをつかんでもらうことができ得れば幸と思うのであるが、日々の疲れと不馴れから、思わぬ懈怠の姿となる例はめずらしくない。能化の立場として、これはあなたがち受者の不信心、不熱心とばかりは言いきれないものがあると思うのである。

第一にわからないと言うことである。愚頓念仏を第一の義とする立場に立てばわからないことの方が本義であってわかる必要がないことかも知れないが、それは信の段階におけることであって、やはりわかる程度はわかってもらわなければ

と刃を合せて、ハッとした容子だった。ふと鑑を見た瞬間、主君と気付いたからである。彼は肝が転倒するばかりおどろいて力を引くと、

「不忠者、来いッ」

家康の一喝におそれおののいて、後をも見ずに逃げ去ってしまった。

家康の近侍、平岩七之助親吉は、逃げゆく寛助太夫に向って

「返えせ、返えせ」

と、声をかけた。呼び止められて寛は取って返すと、互に白刃を交わして暫し打ち合っていた。寛の腕がまさっていたのか、平岩は内甲へハッしと切先を打ち込まれてどっと倒れた。すかさず寛がかけよって忽ち首にしようとした。その時、

「おのれッ」

と怒号する方をふりかえると、家康が槍をとって馬を飛ばして来る姿に、寛は驚きおそれて平岩をそのままにして逃げ去って行った。こうして家康と家臣との間に何の宿業からも全面的な武力衝突が繰り広げられて行ったのであった。

表紙の解説

阿弥陀如来像

福島・白水 阿弥陀堂

白隠の「遠羅天釜」に元祿のころの二人の浄土宗のお坊さんの記述がある。一心不乱の唱名の結果、三昧発得した円恕というお坊さんは独湛老人のもとを訪れた。「どこから来たか」「山城からです」「何宗のものか」「浄土宗です」「ではアミダさんの年は幾つじゃ」「私と同じ年です」「お前は幾つじゃ」「アミダさんと同じ年」「お前は今どこにいる」すると円恕は左手を握ったまま少し上にあげた。独湛は真実の念仏者だと感謝したという。

日本の至る所にアミダ仏はまつられている。そのことになんの不思議もないけれど、ふと気づいた途端、不思議でしかたがない。八百五年前に藤原氏の手によって建立された白水の阿弥陀堂は優雅な姿のまま今日に至っている。そのお堂にかくも柔和なアミダさまがおられるとは、歴史を越えて端坐される姿を一体、何人の人が知っているのだろうか。だがその仏のみ前で手を合わせたそのとき、仏像は始めて生き生きと私のなかに交流する。円恕が私と同年という意味も、私が唱えさせてもらった念仏とともにあることを暗示しておくゆかしい。(石上善応)

「藤十郎、脛の白き武者振りにて、我と槍を組まんなどとは笑止千万」

槍を大地に突き立ててしまつて、にっこり笑つた。

相手にしないと云う態度を示されて、カンカンになった藤十郎、

「われを恐れて戦わぬのか」と毒づいた。

「おお、お望みならば」

やおら手につばをはきかけると、

「いざ参らん」

槍を引き抜いて、しごき初めた。

「さらば」

水野は槍を合せたが、いかにせん近づき得ない。

氣負つた水野も蜂屋の鋭鋒にじりじりと押され退き、鋭い穂先がくり出された瞬間、

「あつと」

叫んで、思わず脇の方へ二三間ばかりはね跳んでしまつた。

「さてこそ申さぬことかよ。この半之丞の槍先に刃向い得るものはあるまいに」

せせら笑つて槍を小脇にかかえ、悠々と退

いて行つた。

蜂屋と槍を合した藤十郎の姿を遙かに眺めた家康は、水野危うしと見て馬を一散に飛ばして駆けて来た時には、既に槍を引いて退くところであつた。

「蜂屋、返えせッ」

彼のうしろ姿に怒鳴つた。

家康に声かけられて振り向いたが、

「や、これは、今度は殿か、殿ではかなわぬわ」

つぶやきながら、槍をかかえてスタコラ走り出してしまつた。

「蜂屋、きたなし、返せ」

大音に呼ばわりつつ、蜂屋の跡を追つたのは松平金助である。

蜂屋ふみ止まると、

「殿なればこそ逃げもしたのだぞ。若輩者が返せなどとはおこがましい。いざ物見せてくれようぞ」

槍をつけて来た。

蜂屋の槍は、赤檜を太く削らせた三間余の長柄の槍で、長吉の鍛えた五寸許の穂先をつけ、それが紙を吹きかけても貫き通るほど研

ぎすまされていた名槍であつた。

「我が槍先には、たとえ鬼神たりと雖も向うものは通さぬぞ」

常にこう豪語していたほど、槍では武名をとつていた大力剛勇の大男であつた。

「うぬらの手に合う半之丞ではない。退け退け」

金助を威嚇して五六度突きしりぞけていたが、尚も執拗に突きかかつて来る金助に業を煮した蜂屋

「エイッ」

裂帛の気合と共に、金助めがけて槍を投げつけた。

「ウーム」

あわれ金助の腹の真中を、血煙り立てて前より後にデンガクさしに貫いてしまつた。

すかさず走り寄つて、槍を引き抜こうとした途端、

「おのれ、につくき槍屋め」

と叫んで、乗りつけざま斬つてかかった者があつた。

「オーッ」

野獣のように咆え、蜂屋は声の主とガチリ

と刃を合せて、ハッとした容子だった。ふと鎧を見た瞬間、主君と気付いたからである。彼は肝が転倒するばかりおどろいて力を引くと、

「不忠者、来いッ」

家康の一喝におそれおののいて、後をも見ずに逃げ去ってしまった。

家康の近侍、平岩七之助親吉は、逃げゆく寛助太夫に向って

「返えせ、返えせ」

と、声をかけた。呼び止められて寛は取って返すと、互に白刃を交わして暫し打ち合っていた。寛の腕がまさっていたのか、平岩は内甲へハッしと切先を打ち込まれてどっと倒れた。すかさず寛がかけよって忽ち首にしようとした。その時、

「おのれッ」

と怒号する方をふりかえると、家康が槍をとって馬を飛ばして来る姿に、寛は驚きおそれて平岩をそのままにして逃げ去って行った。こうして家康と家臣との間に何の宿業からも全面的な武力衝突が繰り広げられて行ったのであった。

表紙の解説

阿弥陀如来像

福島・白水 阿弥陀堂

白隠の「遠羅天釜」に元祿のころの二人の浄土宗のお坊さんの記述がある。一心不乱の唱名の結果、三昧発得した円恕というお坊さんは独湛老人のもとを訪れた。「どこから来たか」「山城からです」「何宗のものか」「浄土宗です」「ではアミダさんの年は幾つじゃ」「私と同じ年です」「お前は幾つじゃ」「アミダさんと同じ年」「お前は今どこにいる」すると円恕は左手を握ったまま少し上にあげた。独湛は真実の念仏者だと感謝したという。

日本の至る所にアミダ仏はまつられている。そのことになんの不思議もないけれど、ふと気づいた途端、不思議でしかたがない。八百五年前に藤原氏の手によって建立された白水の阿弥陀堂は優雅な姿のまま今日に至っている。そのお堂にかくも柔和なアミダさまがおられるとは、歴史を越えて端坐される姿を一体、何人の人が知っているのであろうか。だがその仏のみ前で手を合わせたそのとき、仏像は始めて生き生きと私のなかに交流する。円恕が私と同年という意味も、私が唱えさせてもらった念仏とともにあることを暗示しておくゆかしい。(石上善応)

「藤十郎、脛の白き武者振りにて、我と槍を組まんなどとは笑止千万」

槍を大地に突き立ててしまつて、にっこり笑つた。

相手にしないと云う態度を示されて、カンカンになった藤十郎、

「われを恐れて戦わぬのか」と毒づいた。

「おお、お望みならば」やおら手につばをはきかけると、

「いざ参らん」槍を引き抜いて、しごき初めた。

「さらば」水野は槍を合せたが、いかにせん近づき得ない。

氣負つた水野も蜂屋の鋭鋒にじりじりと押され退き、鋭い穂先がくり出された瞬間、

「あつと」叫んで、思わず脇の方へ二三間ばかりはね跳んでしまつた。

「さてこそ申さぬことかよ。この半之丞の槍先に刃向い得るものはあるまいに」

せせら笑つて槍を小脇にかかえ、悠々と退いて行つた。

蜂屋と槍を合した藤十郎の姿を遙かに眺めた家康は、水野危うしと見て馬を一散に飛ばして駆けて来た時には、既に槍を引いて退くところであつた。

「蜂屋、返えせッ」彼のうしろ姿に怒鳴つた。

家康に声かけられて振り向いたが、

「や、これは、今度は殿か、殿ではかなわぬわ」

つぶやきながら、槍をかかえてスタコラ走り出してしまつた。

「蜂屋、きたなし、返せ」大音に呼ばわりつつ、蜂屋の跡を追つたのは松平金助である。

蜂屋ふみ止まると、

「殿なればこそ逃げもしたのだぞ。若輩者が返せなどとはおこがましい。いざ物見せてくれようぞ」

槍をつけて来た。

蜂屋の槍は、赤檜を太く削らせた三間余の長柄の槍で、長吉の鍛えた五寸許の穂先をつ

け、それが紙を吹きかけても貫き通るほど研

ぎすまされていた名槍であつた。

「我が槍先には、たとえ鬼神たりと雖も向うものは通さぬぞ」

常にこう豪語していたほど、槍では武名をとつていた大力剛勇の大男であつた。

「うぬらの手に合う半之丞ではない。退け退け」

金助を威嚇して五六度突きしりぞけていたが、尚も執拗に突きかかつて来る金助に業を煮した蜂屋

「エイッ」裂帛の気合と共に、金助めがけて槍を投げつけた。

「ウーム」あわれ金助の腹の真中を、血煙り立てて前より後にデングクさしに貫いてしまつた。

すかさず走り寄つて、槍を引き抜こうとした途端、

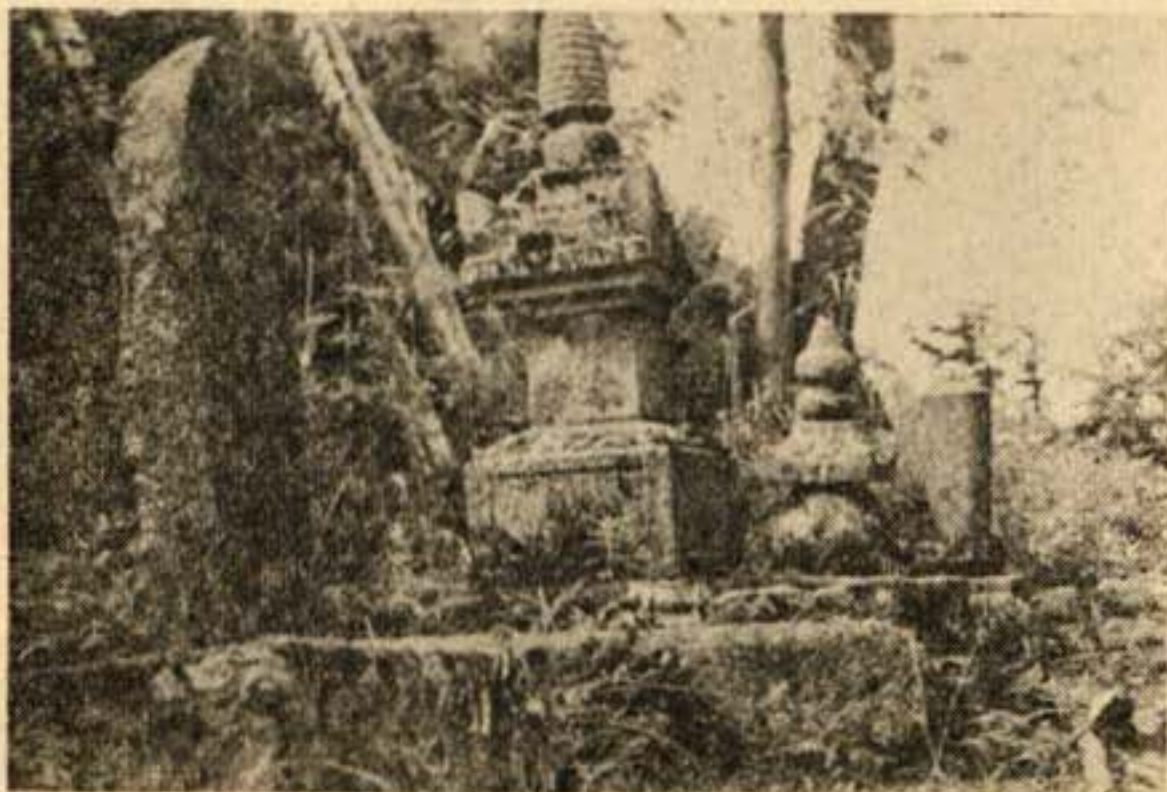
「おのれ、につくき槍屋め」と叫んで、乗りつけざま斬つてかかった者があつた。

「オーッ」野獣のように咆え、蜂屋は声の主とガチリ

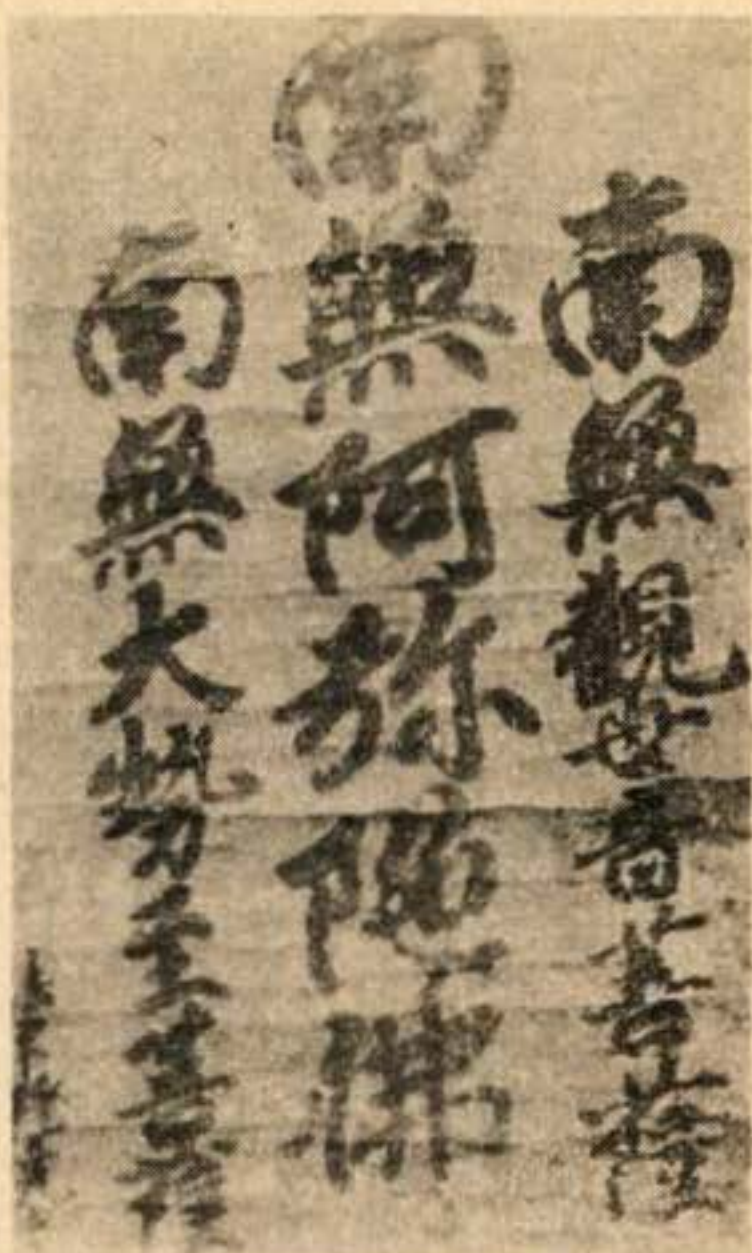
— 42 —

系をひく寺院は数多くでき、未完成ではあるが、本末関係らしい組織ができ上るのである。そんなことから禪宗の多かった当地方にかなりの念仏僧を獲得することになり、やがては本寺の清浄華院よりも栄えてくるのである。天正五年（一五七七）織田信長は安土に築城のとき、慈恩寺のあとに浄厳院を建立し、阿弥陀寺の七世明徳を迎えて開山とした。そして浄厳宗と呼び、近江・伊賀の寺院八百八カ寺を末寺についてその本寺とした。有名な安土宗論は同七年五月二十七日この寺で行なわれたのである。信長が明徳を招請したことは、多分に彼の宗教政策によるものであるが、当時における浄土宗の性格の一端を示すものであろう。一条派発展の上で忘れられないのは敦賀の西福寺である。開山の良如は越前の人、京都の出で清浄華院の八世敬法のもとで修行し、応安元年（一三六八）藤原重経の帰依をえて敦賀に西福寺を草創した。良如の活躍により明徳元年には勅願所となり、応永年間に入ると藤原将経などの土地寄進があり、また良如自身も西福寺に土地を寄進し、経済的な基盤が確立してくる。その後皇室との関係をもちつつ幕府の祈願所となって増々栄え、近世に入ると香衣・紫衣の綸旨を賜わり、本寺と同格の勢力を示すようになった。こうして西福寺の住持は、五十歳以上の学僧、紫衣を着る許可をもつ僧侶でなければならぬという規則ま

でつくられ、塔頭十一、末寺五十三ヶ寺を数えるという大寺にまでふくれ上っていった。浄土宗寺院には名園が少ないが、名勝にも指定されている。「西福寺書院庭園」はすばらしい。誰の作かは明らかでないが、室町時代の代表的な名園で、自然美を十分に生かし、大規模な後方の山を「背景」に、「観経曼陀羅」を再現したものと私は思っている。また西福寺に現存する古文書古記録などは、学界に大きな貢献をするものであり、大切に保存されることを望んでやまない。このように室町における一条派は、京都中心の公家衆文化と、近江越前を中心とする庶民文化に分かれて発展するが京都の方は公家衆の盛衰と同じ道をたどり、他は時代にあった一条派へ脱皮するのである。



隆堯の墓(阿弥陀寺)



三尊名号 (隆堯筆)

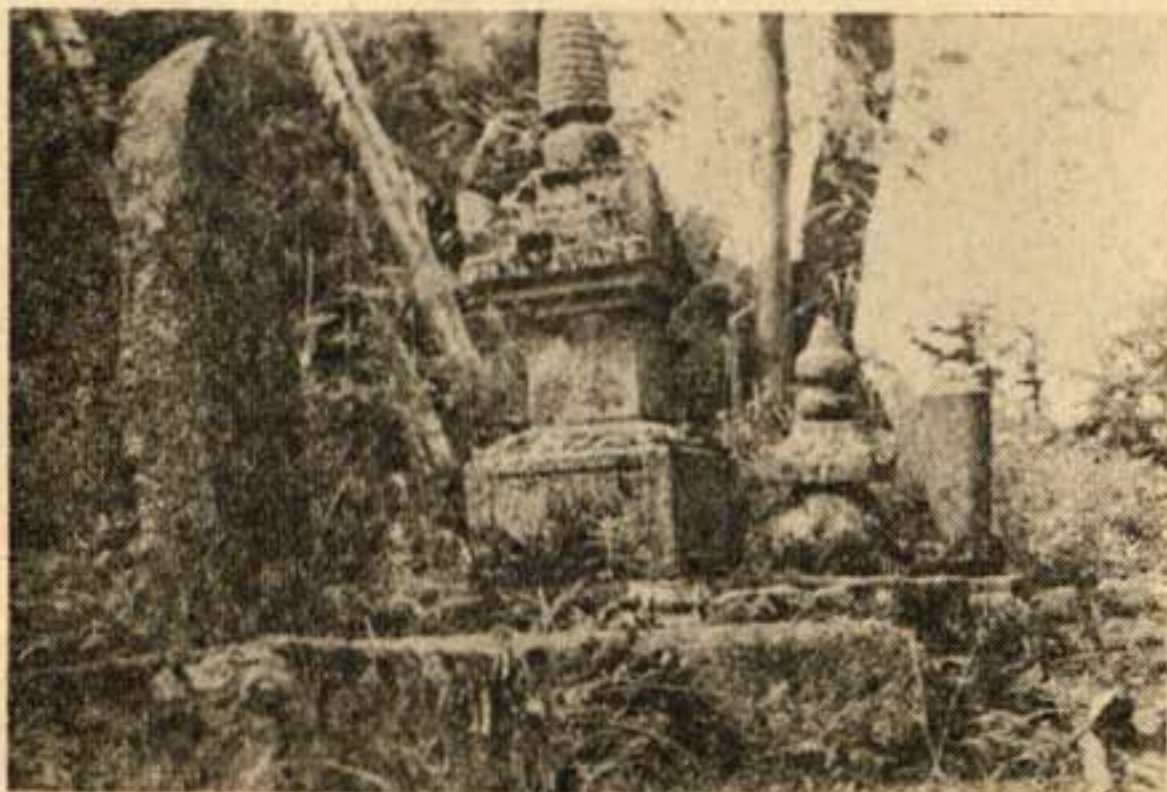
れて浄土に転じ、ゆかりの清浄華院に入って修業をし、等閑とは反対に庶民救済に尽力した。彼は清浄華院を出て近江の金勝山に登ったが、ここは女人結界の天台山であるため山を下りて浄厳房という草庵を結び布教に専心することになった。これは同室で貴族層と交わった兄弟弟子等閑の反動とも思われるが、結果的には貴重な成功をおさめ、附近の庶民に多くの浄土への改宗者を出したという。これこそ浄土本来の姿であり、従来ほとんど知られてない彼ではあるが、私は浄土教発展の上に高く評価しなければならない一人だと思う。現在の浄土宗は白旗派になっているが、もし一条派に傑出した僧侶がでて現在まで続いたとすれば聖岡同様、等閑と並んで当然浄土宗中興の祖となるに十分な人であると思う。

慈賀県安土の浄厳院には隆堯の著書や書写本が現存する。とりわけ『称名念仏奇特現証集』は説話物語として貴重なものであり『十王讃嘆修善鈔』は儒者の思想をおり込んでまとめた珍しいものである。その他本地垂迹の思想をもとに神仏の合同を説いた『神子問答』などを読むと、彼の広い分野にわたる勝れた知識がしのばれる。また『逆修説法』や『黒谷上人語灯録』など、その写本は原形に近く、いずれも貴重なものである。今のうちに『続浄土宗全書』などに収めて後世に残すことを考えねばならないと痛切に感ずる。

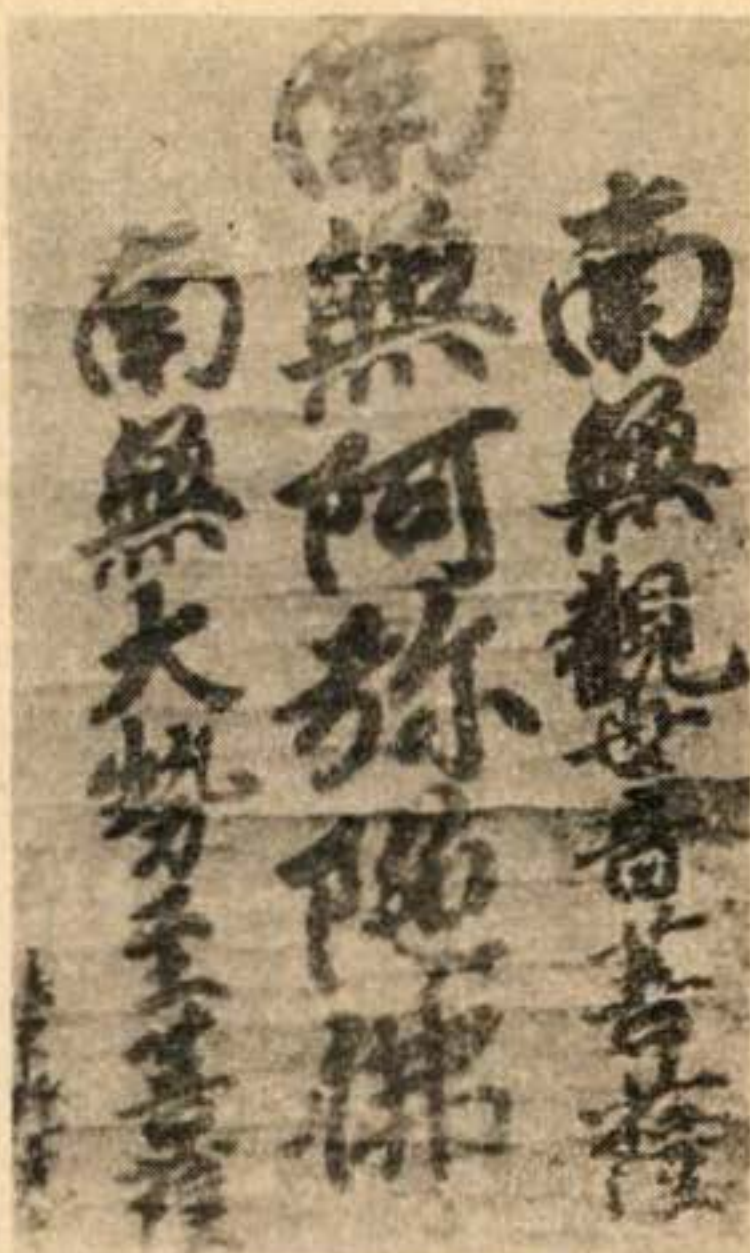
隆堯の弟子もかなり増加し湖東方面に教化をはかったが、中でも隆阿は知恩院へすすんで二十一世となった。三世の宗真のとき草庵は拡大され阿弥陀寺となって発展する。宗真は近江の守護佐々木氏の出自であるため有利な条件もあったであろうが、中々の実力者で経済的にも恵まれたらしく、寺を整備し弟子の育成に尽力した。そのために多くの弟子が集った。そこで宗真は十カ条の「阿弥陀寺清規」を作り、きびしい念仏を行うばかりでなく、あくまでも在家の人々と接して指導するという規制を行なっていった。ここにはもう教団という組織が芽生えてゆく。そしてそこで育成されたものは、阿弥陀寺を本寺と称えるようになり、彼らによって草創される寺院は末寺という形になってゆく。こうして阿弥陀寺の法

系をひく寺院は数多くでき、未完成ではあるが、本末関係らしい組織ができ上るのである。そんなことから禪宗の多かった当地方にかなりの念仏僧を獲得することになり、やがては本寺の清浄華院よりも栄えてくるのである。天正五年（一五七七）織田信長は安土に築城のとき、慈恩寺のあとに浄厳院を建立し、阿弥陀寺の七世明徳を迎えて開山とした。そして浄厳宗と呼び、近江・伊賀の寺院八百八カ寺を末寺についてその本寺とした。有名な安土宗論は同七年五月二十七日この寺で行なわれたのである。信長が明徳を招請したことは、多分に彼の宗教政策によるものであるが、当時における浄土宗の性格の一端を示すものであろう。一条派発展の上で忘れられないのは敦賀の西福寺である。開山の良如は越前の人、京都の出で清浄華院の八世敬法のもとで修行し、応安元年（一三六八）藤原重経の帰依をえて敦賀に西福寺を草創した。良如の活躍により明徳元年には勅願所となり、応永年間に入ると藤原将経などの土地寄進があり、また良如自身も西福寺に土地を寄進し、経済的な基盤が確立してくる。その後皇室との関係をもちつつ幕府の祈願所となって増々栄え、近世に入ると香衣・紫衣の綸旨を賜わり、本寺と同格の勢力を示すようになった。こうして西福寺の住持は、五十歳以上の学僧、紫衣を着る許可をもつ僧侶でなければならぬという規則ま

でつくられ、塔頭十一、末寺五十三ヶ寺を数えるという大寺にまでふくれ上っていった。浄土宗寺院には名園が少ないが、名勝にも指定されている。「西福寺書院庭園」はすばらしい。誰の作かは明らかでないが、室町時代の代表的な名園で、自然美を十分に生かし、大規模な後方の山を「背景」に、「観経曼陀羅」を再現したものと私は思っている。また西福寺に現存する古文書古記録などは、学界に大きな貢献をするものであり、大切に保存されることを望んでやまない。このように室町における一条派は、京都中心の公家衆文化と、近江越前を中心とする庶民文化に分かれて発展するが京都の方は公家衆の盛衰と同じ道をたどり、他は時代にあった一条派へ脱皮するのである。



隆堯の墓(阿弥陀寺)



三尊名号 (隆堯筆)

れて浄土に転じ、ゆかりの清浄華院に入って修業をし、等閑とは反対に庶民救済に尽力した。彼は清浄華院を出て近江の金勝山に登ったが、ここは女人結界の天台山であるため山を下りて浄厳房という草庵を結び布教に専心することになった。これは同室で貴族層と交わった兄弟弟子等閑の反動とも思われるが、結果的には貴重な成功をおさめ、附近の庶民に多くの浄土への改宗者を出したという。これこそ浄土本来の姿であり、従来ほとんど知られてない彼ではあるが、私は浄土教発展の上に高く評価しなければならない一人だと思う。現在の浄土宗は白旗派になっているが、もし一条派に傑出した僧侶がでて現在まで続いたとすれば聖岡同様、等閑と並んで当然浄土宗中興の祖となるに十分な人であると思う。

慈賀県安土の浄厳院には隆堯の著書や書写本が現存する。とりわけ『称名念仏奇特現証集』は説話物語として貴重なものであり『十王讃嘆修善鈔』は儒者の思想をおり込んでまとめた珍しいものである。その他本地垂迹の思想をもとに神仏の合同を説いた『神子問答』などを読むと、彼の広い分野にわたる勝れた知識がしのばれる。また『逆修説法』や『黒谷上人語灯録』など、その写本は原形に近く、いずれも貴重なものである。今のうちに『続浄土宗全書』などに収めて後世に残すことを考えねばならないと痛切に感ずる。

隆堯の弟子もかなり増加し湖東方面に教化をはかったが、中でも隆阿は知恩院へすすんで二十一世となった。三世の宗真のとき草庵は拡大され阿弥陀寺となって発展する。宗真は近江の守護佐々木氏の出自であるため有利な条件もあったであろうが、中々の実力者で経済的にも恵まれたらしく、寺を整備し弟子の育成に尽力した。そのために多くの弟子が集った。そこで宗真は十カ条の「阿弥陀寺清規」を作り、きびしい念仏を行うばかりでなく、あくまでも在家の人々と接して指導するという規制を行なっていった。ここにはもう教団という組織が芽生えてゆく。そしてそこで育成されたものは、阿弥陀寺を本寺と称えるようになり、彼らによって草創される寺院は末寺という形になってゆく。こうして阿弥陀寺の法

編集後記

○創立以来、ここに三十年短いようで長い歴史です。日本の歴史を見ても、幾度転じています。戦後一時休刊し、また復刊した喜び。漸く今日の浄土誌になり得た苦難の道。これも一偏に読者各位の御協力の賜ものと、関係者一同衷心御礼申し上げます。

○生者必滅と申しますが、創刊以来御努力いただいた方の中には、已に幽冥境を異にした方々もあります。中でも真野正順・中村辨康佐藤賢順の各先生は中心となつて活躍下さった方々です。冥福を祈りつつ、特集の中に出て頂きました。○玉稿を頂いた方々には尚多くの人々が他界されております。吉田絃次郎先生の如きは、永い間巻頭を飾つて頂いただけに、三十周年

を迎えて感慨無量です。文豪佐藤春夫先生も度々本誌を飾って頂きました。三十年の歴史はこれらの人々の力に支えられていたものです。

○幸田文先生に玉稿を頂いたのも、過去にそんな縁があったからです。あげれば数限りない有縁無縁の人々の力が今日に至った事と感謝し、読者各位と共に、今後の発展に努力してまいりたいと思います。遍く御支援の程を願ひ上げます。

○記念事業としていろいろ企画しました。本誌の特集・浄土トラクトシリーズ・記念パーティ・記念講演会などです。その他読者倍増運動も推進したいと思ひます。よろしく御協力の程願ひます。東京と京都にて記念パーティを予定しています御参加お待ちいたします

○浄土宗教学院主催の教学大会は本年十一月六・七両日仏教大学で開かれ、東西の学者が研究討論します。○アメリカのクレアモントでの世界宗教学大会に参加された竹中・宮林・佐藤各先生は無事帰国されました。いづれ本誌にも土産話を頂く予言です。

○大正大学では女子のみの実践仏教を「女子のみの座禅会」として東京の九品仏で行ないました。珍しい会だけに放送・新聞等で話題になっていきます。十月十五・十六・十七日の間行われ三十人程参加しました。

○先月号の表紙、写真とその解説が編集の手違いでく違つてしまい、御迷惑おかけしました。

表紙は薬師像（神奈川・宝城坊）ですおわび方訂正いたします。

「浄土」講読規定

一部 定価 金五十円

（送料 六円）

会費一力年 金六〇〇円

（送料 不要）

浄土 十一月号

昭和十年五月二日

第三種郵便物認可

昭和四十年十月二十五日 印刷

昭和四十年十一月一日 発行

定価 五十円

編集人 宮林 昭彦

発行人 佐藤 密雄

印刷人 関 二三男

印刷所 新光社印刷株式会社

東京都千代田区根田町一ノ二

発行所 法然上人鑽仰会

電話東京二六二局五九四四番

振替東京八二一八七番

三十周年記念浄土トラクト

ものいう石	大正大学 教授 文 博士	竹中 信常著	新書判 価 150円 150 P ㇿ 40円
諸仏の戒め		村瀬 秀雄著	B 6 判 価 5円 4 P ㇿ 10円
四季の寺まいり	大正大学 助 教 授	安居 香山著	新書判 価 25円 20 P ㇿ 10円
浄土の信仰と生活	大正大学 助 教 授	宮林 昭彦著	新書判 予価 50円 近 刊
経本 浄土宗	檀信 徒用	のおつとめ 村瀬 秀雄編	価 90円 ㇿ 20円

修養ひめくり

価 100円・ㇿ 40円 用紙33枚
タテ37CM ヨコ13CM

会員のかたには2割引(単価80円) 送料実費

浄土宝暦

価 25円・ㇿ 10円 38ページ
(宗祖御影一枚起請文など掲載)

50部以上より単価20円 送料実費

既刊浄土トラクト

選択集私解	大正大学 文 博士	竹中 信常著	新書判 価 120円 120 P ㇿ 30円
一枚起請文をめぐって		村瀬 秀雄著	新書判 価 120円 102 P ㇿ 30円
真理のはなたば	大正大学 文 博士	佐藤 良智著	新書判 価 70円 ㇿ 20円
日常勤行式の解説		村瀬 秀雄著	新書判 価 100円 90 P ㇿ 20円
信仰への導き	文 博士	佐藤 賢順著	B 6 判 価 15円 16 P ㇿ 10円
こ法語 の しおり 葵ぐさ		村瀬 秀雄著	B 6 判 価 15円 16 P ㇿ 10円
浄土宗のおしえ	大正大学 助 教 授	宮林 昭彦著	新書判 価 25円 20 P ㇿ 10円

念仏をひろめるために心をそそぐ布教家に (多数申込みには)
真実の信仰をもとめている檀信徒の方々に 割引いたします

発行所 法然上人鑽仰会

電話 (262) 5944
振替 東京 82187